Conviviality 研究会　2017 年 12 月 3 日/2018 年 2 月 25 日開催　レポーター：中島久夫

Louis Althusser　ルイ・アルチュセール

（1918 年 10 月 16 日 - 1990 年 10 月 22 日）

「アルチュセールを読む（1)」～前期の主要概念を中心に

Contents

１．生涯と時期区分 1

２．著作 4

2.1 生前に出版されたもの 4

2.2 死後に出版されたもの 4

３．前期のアルチュセールが提起した諸概念 7

3.1 徴候的読解（lecture symptomale） 8

3.2 問題設定/問題の構造（problématique）と認識論的切断/断絶（coupure épistémologique / rupture épistémologique） 12

3.3 重層的決定/規定（surdétermination） 21

3.4 理論的実践の《理論》（《théorie》 de la pratique théorique） 31

〔参考資料①〕アルチュセールのジャック・マルタンへの追悼文 39

〔参考資料②〕マルクス『フォイエルバッハにかんするテーゼ』 40

〔参考資料③〕エンゲルス『資本論　第二部　序言』（抜粋） 43

〔参考資料④〕ヘーゲル『小論理学』より～論理学のより立ち入った概念と区分（弁証法に関する部分の抜粋） 46

〔参考資料⑤〕マルクス『資本論　第二版の後書き』（抜粋） 48

１．生涯と時期区分

1918 年 10 月 16 日、フランス領アルジェリア、ビルマンドレで生まれる。
1936 年 - 1939 年 父の転勤に伴い、フランス、リヨンに転居。王党派カトリックの影響を受ける。
1939 年 7 月 高等師範学校（エコール・ノルマル）に合格。
1939 年 9 月 兵役召集。まもなくドイツ軍の捕虜になり、以降 5 年間の虜囚生活を送る。
1945 年 終戦により解放、モロッコ、カサブランカで家族に再会。
1946 年 1 月、エレーヌ・ルゴティアン、別名リトマン(Hélène Legotien, alias Rytman)との出会い。
1946 年 復活祭の時期、教皇ピウス 12 世と会見。
1946 年 10 月、高等師範学校に復学。
1947 年 ガストン・バシュラールの指導下で、学位論文（DES）として、**「ヘーゲル哲学における内容の観念」**を提出。
1948 年 「教会の青年」グループと接触。
1948 年 8 月 アグレガシオン（教授資格試験）に 2 位で合格。
1948 年 9 月 高等師範学校の哲学復習教師(Agrégé-répétiteur)として採用。そこで 30 人の学生を受け持つことになる。その中には以下の名前が認められる。ミシェル・フーコー、ミシェル・ヴェレ、ピエール・ブルデュー、ミシェル・セール、ジャック・デリダ、アラン・バディウ、ジャック・ブーヴレス。
1948 年 11 月 フランス共産党に入党。
1955 年 クレール・Z との出会い。
1959 年 **『モンテスキュー 政治と歴史』**を上梓。
1964 年 パリ精神分析協会を脱退したジャック・ラカンを、高等師範学校に招請する。
1965 年 **『マルクスのために』『資本論を読む』**を上梓。
1968 年 2 月 イタリア共産党の雑誌『ウニタ』に、**「革命の武器としての哲学」**掲載。
1968 年 2 月 フランス哲学会で**「レーニンと哲学」講演。**
1968 年 5 月 五月革命勃発。「バリケードの夜」の後、入院。
1968 年秋 アラン・バディウと決裂。
1968 年 9 月 エレーヌ・リトマンと同棲開始。
1968 年 11 月 ジャン・イッポリット追悼講演。メルロ＝ポンティについて「生前から死んでいた」と述べ、スキャンダルに。
1972 年 7 月 25 日-8 月 1 日 雑誌『フランス・ヌーヴェル』において、哲学のアグレガシオンについて、ダヴィド・カイゼルグリューバーが組織したボイコットに反対する断固たる立場を表明。マキャヴェッリについて講義。**『ジョン・ルイスへの回答』**上梓。
1973 年 10-12 月 睡眠療法のため数次に渡る医療機関滞在。
1975 年 アミアン大学に、「業績にもとづく博士号」を申請、口頭試問を受ける。試問では満場一致で博士号授与該当とされたものの、その後の国の委員会による「審査」で、落されてしまう。
1976 年 2-3 月 エレーヌ・リトマンと正式に結婚。
1976 年 2 月 6 日 二人でスペインを旅行、グラナダ大学などで講演。
1976 年 3 月 **『ポジション』**上梓。
1976 年 4 月 「プロレタリア独裁」概念の放棄に反対して発言。
1976 年 6 月 **論文「フロイト博士の発見」**の執筆。1978 年にレオン・チェルトク(Leon Chertock)に送ることになる文章。
1976 年 9 月 『国際的かつ国際主義的雑誌』の発刊を希望。

1976 年秋～冬 **『事実』**［最初の自伝草稿］を執筆。
1976 年 10 月 ドミニク・ルクール『ルイセンコ プロレタリア科学の現実的歴史』序文。「ポスト革命社会における権力と反対者たち」に関するヴェネツィアでのシンポジウムで報告（「ついにマルクス主義の危機！」）。
1976 年 12 月 ソルボンヌ哲学科共産主義学生同盟に請われ講演。
1977 年 5 月 **『第 22 回大会』**を上梓。内容は 1976 年 12 月の講演。マスペロ社『からの「延安叢書」(Cahier Yenan)の発刊の機会にアラン・バディウと再び接触。
1977 年 6 月 パリ政治学院で**「マキャヴェリの孤独」講演。**
1980 年 3 月 パリ・フロイト派解散の会議に現れる。
1980 年 11 月 エレーヌを絞殺。精神鑑定後、心神喪失による免訴となる。
1984 年 再度鑑定ののち、行政拘束を解かれる。
1988 年 メキシコから来たフィルナンダ・ナバロとの対談をもとにした本が、メキシコで出版される。
1990 年 10 月 22 日、イヴリヌ県のラ・ヴェリエール病院にて、心不全により死去。彼の遺稿は、IMEC（現代出版史資料館）に寄贈され、以降、その一部が公刊されることになる。

アルチュセールが生まれた 1918 年は、和暦では大正七年、第一次世界大戦終結の年に当たる。同年に生まれた著名人には、アレクサンドル・ソルジェニーツィン、レナード・バーンスタイン、ネルソン・マンデラ、イングマール・ベルイマン、日本では、田中角栄、高峰三枝子、堀田善衛、中村真一郎、福永武彦、神島二郎等がいる。

今回の研究会では、思想家としてのアルチュセールの展開に応じて、便宜上以下の時期区分を採用する。

前期：1948 年 11 月～1968 年 4 月（フランス共産党入党から 5 月革命まで）
後期：1968 年 5 月～1990 年 10 月（5 月革命から第二の死まで）

アルチュセールは、何をおいてもマルクス主義の思想家であり、最後までフランス共産党の党内左派の知識人というポジションに留まり続けた。このアルチュセールが占めていたポジションを、デリダは次のように語っている。

JD：アルチュセールは党の内部から、その哲学的・理論的言説を変革することを求め、その変革された言説およびその効果によって党の政策を変えられると信じ続けた人です。私の属したちっぽけなミリュー――ある種の左派の哲学者の小グループ―にとっては、こうした、アルチュセールの言説は、たとえ党の官僚機構がそれを受け入れなかったとしても「成功していた」のです。そうした知識人たちの間では彼は支配的な位置を占めており、党公認の哲学者たちは、内容の乏しい遅れた連中と見なされていました。無論、党の機構の立場からではなく、マルクス主義的インテリゲンチアの立場からそう見なされていたのです。党内ではアルチュセールは少数派であり、多かれ少なかれ無視されていましたが、彼の言説、彼のスタイル、プロジェクトは、ある種のマルクス主義的インテリゲンチアのサークルの中でかなりの権威を有していました。
MS：1968 年の時点で、ですか？

JD：まさにそうです。68 年までです。私にとって彼の言説は、マージナルな反対派の言説ではなく、支配的な言説でした。党機構の視点からではなく、ある種の党内インテリゲンチアの視点から見ての話ですが。(「政治と友情」ジャック・デリダ（インタビュー＝マイケル・スプリンガー）仲正昌樹訳、195 頁)

また、このようなアルチュセールの位置に対して、当時のデリダがどのような状況に置かれていたかについては、以下のようにも語っている。

JD：しかし、私が置かれていた空間は、言ってみれば、少しばかり奇妙でした。私は自分のフッサール研究を多少なりとも継続的に進めていました。その年の間、私はハイデッガーにおける「歴史」についての授業をしていました。この授業には、さっき名前を挙げた学生たちの何人かも参加していました。ランシエール、バリバール、その他前年にアグレガシオンの準備を指導した学生たちとの関係は極めて良好でした。しかし逆説的なことに、私がカイマン[1]として教え始めたその時に、さっき言ったアルチュセールのセミナーが始まって、それらの学生たち全員の関心を奪ってしまいました。私はそのことでかなり不満を覚えました。お分かりですよね、急に隅に追いやられた気分でした。私はアルチュセールのセミナーに 1、2 回出席しました。例えば、ランシエールが発表した時などです。その時の成果のいくつかは後に出版されました。

しかし哲学的な視点から見れば、私は自分が極めて困惑すべき状況に置かれていると感じていました。そうした問題系の全体がマルクス主義の領域で疑う余地なく不可欠であると私も思っていました。マルクス主義の領域というのは政治の領域であり、とりわけても党―私自身は党員ではなかったのですが―との関係によって特徴付けられていました。そしてその党は徐々にスターリン主義から離脱しようとしていました（スターリン主義は、私があそこの学生だった頃、非常に専制的な支配力を発揮していました)。しかし私は同時に、そうした問題系―それが素朴だとか、洗練を欠いているとか言うつもりはありません、むしろそうした素朴さとは程遠いものでした―は、私が不可欠であると思っていた、批判的、超越論的、存在論的な問いに対してはあまりに鈍感であるように感じられました。それらの問いは、たとえフッサールとハイデッガーに反抗することになったとしても不可欠であると思えたのです。無論いずれにせよ彼らを通して、彼らに反抗するという形になるわけです。(Ibid、175-176 頁)

本研究会では、ひとまず、アルチュセール前期の思想展開を、その主要概念を検討することで把握したいと考えている。

なお、アルチュセールの伝記については、死後出版されたアルチュセール自身の『未来は長く続く　～アルチュセール自伝』(河出書房新社 2002 年）と、ヤン・ムーリエ・ブータンの『アルチュセール伝（思想の形成（1918→1956))』(筑摩書房、1998 年）があるが、後者の続編は今に至るも、フランスでも刊行されていない。

[1] 高等教育教授資格試験（アグレガシオン）のための受験指導をする哲学教師の通称。デリダのカイマンはアルチュセールだった。

２．著作

2.1 生前に出版されたもの

1)Montesquieu, la politique et l'histoire, PUF, 1959 ; réédition en coll. « Quadrige »
『政治と歴史―モンテスキュー・ルソー・ヘーゲルとマルクス』紀伊國屋書店 1974 年
『政治と歴史―モンテスキュー・ヘーゲルとマルクス』新訂版 紀伊國屋書店 2004 年

2)Pour Marx, Maspero, coll. « Théorie », 1965 ; réédition augmentée (avant-propos d'Étienne Balibar, postface de Louis Althusser), La Découverte, coll. « La Découverte / Poche », 1996
『甦るマルクス』人文書院 1968 年
『マルクスのために』平凡社ライブラリー 1994 年

3)Lire le Capital (en collaboration avec Étienne Balibar, Roger Establet, Pierre Macherey et Jacques Rancière), Maspero, coll. « Théorie », 2 volumes, 1965 ; rééditions coll. « PCM », 4 volumes, 1968 et 1973 ; puis PUF, coll. « Quadrige », 1 volume, 1996
『資本論を読む』合同出版 1974 年
『資本論を読む』上・中・下 筑摩学芸文庫 1996-97 年

4)Lénine et la philosophie, Maspero, coll. « Théorie » 1969 ; réédition augmentée sous le titre Lénine et la philosophie (suivi de Marx et Lénine devant Hegel), coll. « PCM », 1972
『レーニンと哲学』人文書院 1970 年

5)Ideologie et appareils ideologiques d'Etat, La pensee numero 151, juin, 1970
『アルチュセールの「イデオロギー」論』三交社 1993 年

6)Réponse à John Lewis, Maspero, coll. « Théorie », 1973
『歴史・階級・人間―ジョン・ルイスへの回答』福村出版 1974 年

7)Philosophie et philosophie spontanée des savants (1967), Maspero, coll. « Théorie », 1974
『科学者のための哲学講義』福村出版 1977 年

8)Éléments d'autocritique, Hachette, coll. « Analyse », 1974
『自己批判 ： マルクス主義と階級闘争』福村出版 1978

9)La Transformation de la philosophie : conférence de Grenade, 1976

10)XXIIe Congrès, Maspero, coll. « Théorie », 1977

11)Ce qui ne peut plus durer dans le parti communiste, Maspero, coll. « Théorie », 1978
『共産党のなかでこれ以上続いてはならないこと』新評論 1978 年

12)Positions, Éditions Sociales, 1976; réédition coll. « Essentiel », 1982

2.2 死後に出版されたもの

13)L'avenir dure longtemps (suivi de Les faits), Stock / IMEC, 1992 ; réédition augmentée et présenté par Olivier Corpet et Yann Moulier-Boutang, Le Livre de poche n° 9785, 1994 ; édition augmentée : Flammarion, coll. « Champs Essais », 2013
『未来は長く続く　～アルチュセール自伝』河出書房新社 2002 年

14)Journal de captivité (Stalag #4 1940-1945), Stock / IMEC, 1992

15)Écrits sur la psychanalyse. Freud et Lacan, Stock / IMEC, 1993 ; réédition Le Livre de poche, coll. « Biblio-essais », 1996
『フロイトとラカン―精神分析論集』人文書院 2001 年

16)Sur la philosophie, Gallimard, coll. « L'infini », 1994
『哲学について』筑摩書房 1995 年、筑摩学芸文庫 2011 年

17)Philosophie et marxisme : entretiens avec Fernanda Navarro (1984-1987)
『不確定な唯物論のために―哲学とマルクス主義についての対話』大村出版 1993 年、2002 年復刊

18)Écrits philosophiques et politiques 1, textes réunis par François Matheron, Stock / IMEC, 1994, 588 p.
『哲学・政治著作集』1 藤原書店 1999 年
〔I　アルチュセール以前のルイ・アルチュセール～編者解題/善意のインターナショナル（1946 年）/G・W・F ヘーゲルの思考における内容について（1947 年）/人間、この夜（1947 年）/ヘーゲルへの回帰―講壇修正主義の結語（1950 年）/事実問題（1949 年）/ジャン・ラクロワへの手紙（1950-1951 年）/結婚の猥褻性について（1951 年）・II　危機のテキスト～編者解題/ルイ・アルチュセールによって立てられた一つの問い（1972 年）/自らの限界にあるマルクス（1978 年）・付録 メラブへの手紙（1978 年）・III　アルチュセール以後のルイ・アルチュセール～編者解題/出会いの唯物論の地下水脈（1982 年）/唯物論哲学者の肖像（1986 年）・訳者あとがき〕

19)Écrits philosophiques et politiques 2, textes réunis par François Matheron, Stock / IMEC, 1995, 606 p.
『哲学・政治著作集』2 藤原書店 1999 年
〔第二巻編者解題・I　二人の哲学者―マキァヴェッリ-フォイエルバッハ～マキァヴェッリと私たち（1972-1986 年）/フォイエルバッハについて（1967 年）・II　哲学のほうへ/哲学のほうへ（科学者のための哲学講義第 5 講）（1967 年）/哲学についてのノート（1967-1968 年）・III　「哲学における政治的扇動者」/批判に答える（1963 年）/哲学の状況とマルクス主義の理論研究（1966 年 6 月 26 日）/レヴィ＝ストロースについて（1966 年 8 月 20 日）/ヒューマニズム論争（1937 年）・IV　芸術論/パオロ・グラッシへの手紙（1968 年 3 月 6 日）/ブレヒトとマルクスについて（1968 年）/芸術の認識をめぐる手紙（アンドレ・ダスプレへの返信）（1966 年）/シュルレアリスムを前にして―アルヴァレス＝リオス（1962 年）/抽象の画家クレモニーニ（1964-1966 年）/ルチオ・ファンティについて（1977 年 3 月）/ラム（1977 年）/訳者あとがき/概念・人名索引〕

20)Sur la reproduction, PUF, coll. « Actuel Marx Confrontations », 1995＝本書
『再生産について』平凡社 2005 年
『再生産について』上・下 平凡社ライブラリー 2010 年

21)Psychanalyse et sciences humaines, Librairie generale francaise, 1996
『精神分析講義　～精神分析と人文諸科学について』作品社 2009

22)Machiavel et nous (1962-1986), Stock/IMEC, 1994 ; Tallandier, 2009

23)Solitude de Machiavel, présentation par Yves Sintomer, PUF, coll. « Actuel Marx Confrontations », 1998.
『マキャヴェリの孤独』藤原書店 2001 年
〔第 1 章 歴史の客観性について―ポール・リクールへの手紙（1955 年）/ 第 2 章 レーモン・ポラン 『ジョン・ロックの道徳的政治学』について（1960 年）/ 第 3 章 哲学と人間科学（1963 年）/ 第 4 章「〈社会契約〉」について（1967 年）/ 第 5 章レーニンと哲学（1968 年）/ 第 6 章 革命の武器としての哲学―8 つの質問に答える（1968 年）/ 第 7 章 自己批判の要素（1972 年）/ 第 8 章 アミアンの口頭弁論（1975 年）/ 第 9 章 終わった歴史、 終わらざる歴史（1976 年）/ 第 10 章 G・デュメニル著 『「資本論」における経済法則の概念』への序（1977 年）/ 第 11 章 やっと、マルクス主義の危機！（1977 年）/ 第 12 章「有限」な理論としてのマルクス主義（1978 年）/ 第 13 章 今日のマルクス主義（1978 年）/ 第 14 章 マキャヴェリの孤独（1977 年)〕

24)Lettres à Franca (1961-1973), Stock/IMEC, 1998
『愛と文体 I ―フランカへの手紙 1961.09.03.～1962.01.13』藤原書店 2004 年
『愛と文体 II ―フランカへの手紙 1962.01.15.～1962.12.15.』藤原書店 2004 年

25)Politique et Histoire de Machiavel à Marx - Cours à l'École normale supérieure 1955-1972, Seuil, coll. « Traces écrites », 2006
『政治と歴史: エコール・ノルマル講義 1955-1972』平凡社 2015 年

26)Lettres à Hélène, préface de Bernard-Henri Lévy, Grasset/IMEC, 2011
« Repères biographiques, avertissement aux lecteurs du livre I du Capital et rudiments de bibliographie critique », préface à Karl Marx, Le Capital (livre I), Paris, Garnier-Flammarion, 1969, p. 5-30.

27)Cours sur Rousseau (1972), préface d'Yves Vargas, Le temps des cerises, 2012

28)Initiation à la philosophie pour les non-philosophes, PUF (collection Perspectives critiques), 2014

29)Etre marxiste en philosophie, PUF (collection Perspectives critiques), 2015
『哲学においてマルクス主義者であること』航思社 2016 年

30)Des rêves d'angoisse sans fin: Récits de rêves (1941-1967), suivi de Un meurtre à deux (1985), Grasset/IMEC, 2015
『終わりなき不安夢　夢話 1941-1967』書肆心水 2016 年

３．前期のアルチュセールが提起した諸概念

アルチュセールの名が世に広まったのは、いずれも 1965 年に公刊された著書 Pour Marx, Maspero, coll. « Théorie », 1965（『マルクスのために』）と編著 Lire le Capital, Maspero, coll. « Théorie », 2 volumes, 1965（『資本論を読む』）以降といえる。この二つの書物以前に Montesquieu, la politique et l'histoire, PUF, 1959（『政治と歴史―モンテスキュー』）という著書があるが、アルチュセールの名を決定的なものたらしめたのは、この二つの書物といって差し支えない。

マルクス主義哲学者としてのアルチュセールの哲学的営為の中心は、当然のことながらマルクス、そして『資本論』を読むことに置かれており、前期アルチュセールの思想は、これら二つの著作に集約されている。前者はアルチュセール個人の論文集であり、後者は、アルチュセールを総帥とするアルチュセール学派を形成することになる、ジャック・ランシエール、ピエール・マシュレー、エチエンヌ・バリバール、ロジェ・エスタブレの 4 人との共同作業になる論文集である。

以下に、それぞれの論文集に収録されている論文の一覧を示しておく。

『マルクスのために』　平凡社ライブラリー（1994 年、河野健二、田村俶、西川長夫訳）

・日本の読者へ（1967 年 10 月に書かれた日本語版序文）
・今日的時点（序文）
・フォイエルバハの『哲学的宣言』（1960 年 12 月『ヌーヴェル・クリティーク』）
・若きマルクスについて――理論上の諸問題（1961 年 3 月/4 月『パンセ』）
・矛盾と重層的決定――探求のためのノート＋補遺（1962 年 12 月『パンセ』）
・「ピッコロ」、ベルトラッチーとブレヒト――唯物論的な演劇にかんする覚書（1962 年 12 月『エスプリ』
・カール・マルクス『1844 年の草稿』――経済学・哲学手稿（1963 年 2 月『パンセ』）
・唯物弁証法について――さまざまな起源の不均等性について（1963 年 8 月『パンセ』）
・マルクス主義とヒューマニズム（1964 年 6 月『カイエ・ド・リゼア』）
・「現実的ヒューマニズム」にかんする補足的な覚書（1965 年 3 月『ヌーヴェル・クリティーク』

『資本論を読む』　ちくま学芸文庫　上中下（1996 年、今村仁司訳）

・序文　『資本論』からマルクスの哲学へ：アルチュセール
・緒言：アルチュセール
・『1844 年の草稿』から『資本論』までの批判の概念と経済学批判：ランシエール
・『資本論』の叙述過程について：マシュレー

・『資本論』の対象：アルチュセール
・史的唯物論の根本概念について：バリバール
・『資本論』プランの考察：エスタブレ

これから、この二冊の書物において提起された、幾つかの概念を瞥見していきたい。これらの諸概念は、いずれもその後のフランス現代思想の展開の起点となったものであり、フーコーやデリダ等のその後の思想展開は、この時期のアルチュセールの存在抜きには考えにくい、それくらい決定的なものだった、と見なすことができる。

3.1 徴候的読解（lecture symptomale）

「徴候的読解」とは、アルチュセールが『資本論を読む』の「序文」＝「『資本論』からマルクスの哲学へ」で提起した概念である。

『資本論を読む』において、アルチュセールはまず、彼及び彼の共著者等はすべて哲学者であり、「哲学者として『資本論』を読み、それに問を提起した」（『資本論を読む　上』（ちくま学芸文庫）、20 頁）という。そしてアルチュセールは、マルクス（の著書『資本論』及び『剰余価値に関する諸理論』[2]）に、先ず「古典経済学を読む人」を見出しているのだが、その読み方には「根本的に違う二つの読解原理」（Ibid、28 頁）が働いている、という。アルチュセールは、この二つの読解を以下のように示している。

《第一の読み方》（　　は原著のイタリック体で示されている部分、以下同様）

> マルクスは自分の先行者（例えばスミス）の言説を、彼自身の言説を通して読む。この読み方は、スミスのテクストが尺度としてそれに被せられるマルクスのテクストを通してすけてみえるといった、格子による読み方であるが、この読みの結果は、一致と不一致の目録、スミスが発見したことと彼が失敗したこと、彼の功績と過失、明敏さと見過ごしとの明細書でしかない。事実、この読み方は回顧的な理論的読み方であって、スミスが見ることも理解することもできなかったことは、単に根本的な欠陥としてしか見えない。いくつかの欠如は他の欠如を指し示し、最後の欠如は最初の欠如に送り戻される。（中略）この読み方では、欠如そのものの理由が明らかにならない。欠如の確認が欠如を消しさるからだ。スミスの言説のなかに、その言説の外見上の連続性の下に（スミスには）見えない空所を指摘するのは、マルクスの言説の連続性である。（中略）スミスは視野におさめていたにもかかわらず見（vu）なかった。（中略）かずかずの「見そこない（bévue）」はすべて、不変資本と可変資本との混同という「巨大な見そこない」に多少とも結びついて

[2] 大月書店『マルクス＝エンゲルス全集』26 巻Ⅰ～Ⅲ「剰余価値学説史（『資本論』第 4 巻）」。フランスでは、コスト社から、『経済学説史』の書名で翻訳出版されている。

いるし、この混同は「信じがたい」錯乱をもって古典経済学を支配している。これによって、認識を作る諸概念の体系における過失はすべて、「見る」ことの心理学的な過失に還元されてしまう。そしてもし見そこないを説明するのが見ることの不在であるならば、同様に、そして唯一の必然性をもって、「見る」の現前と鋭さが見られたこと、承認された認識のすべてを説明することだろう。（Ibid、28-29 頁）

ここでは、「認識の仕事のすべてが、単なる視覚関係の再認に還元され、認識の対象の本性のすべてが単なる所与条件に還元されてしまう」（Ibid、30 頁）とアルチュセールはいう。この第一の読解に留まるところでは、「マルクスがスミスの近視眼といわれるものから身をもぎ離した、あの巨大な仕事」（Ibid、30 頁）＝『資本論』も、見ることの単純な差異に還元されてしまい、結局は無に帰するというのだ。

けれども、この第一の読み方に対して、「マルクスのなかには、このような第一の読み方とは共通することのない、まったく別の、第二の読み方がある」（Ibid、31 頁）ことが予告される。アルチュセールは、その第二の読み方の一例として、エンゲルスの導き[3]に従い『資本論』第一巻／第十九章の「賃金論」を挙げている[4]。アルチュセールは、そのマルクスのテクストを引用し、そこに見られる、第一の読み方とは微細に異なる差異を次のように指摘している。

《第二の読み方》

経済学が見ないものは、それが見ているものである。それは経済学に欠けているものではなくて、反対にそれに欠けていないものである。それは経済学がしくじるものではなくて、反対に、それがしくじらないものである。見そこないとは、見ているものを見ないことであり、見そこないはもはや対象にかかわるのではなく、視覚にかかわる。見そこないは見るに関わる見そこないである。見ないことは見ることの内部にあり、それは見ることのひとつの形式でありしたがって、見ることとの必然的関係の中にある。

われわれはここで前に提起した問題そのもの［読むとはどういうことか］に触れているのである。それは、見る行為のなかへの見ない行為の有機的合体という現実化した同一性のなかに実在し、またそれによって提起される問題である。（中略）したがってわれわれは無限の回顧的送り戻しをしないで、唯一無比の領域で定義された、純粋状態にあるわれわれの問題に関わっている。見る行為そのもののなかで見ないことと見ることの必然

[3] 『資本論』第二巻の序文（ドイツ語原典〔ディーツ版〕）15～19 頁を参照。アルチュセールは、このエンゲルスの序文を非常に高く評価しており、『マルクスのために』の序文「今日的時点」の注釈でも、「プロブレマティックと認識論上の切断（前科学的プロブレマティックから科学的プロブレマティックへの変化を示す切断）という二つのテーマに関して」、この「驚くべき理論的な深さをもった」エンゲルスの序文を参照することができると記している。

[4] 正しくは、「第十七章／労働力の価値または価格の労賃への転換」か。続く箇所でアルチュセールが引用しているのは、第十七章のドイツ語原典の 563 頁からの部分となっている。

的にして逆説的なこの同一性を理解することは、われわれの問題（見えるものと見えないものとを統一する必然的連関の問題）をきわめて正確に提起することであり、それをうまく提起することは、それを解決するチャンスを手に入れることである。（Ibid、34-35 頁）

アルチュセールがここで例として持ち出しているのは、以下に示す古典経済学の労働価値説の命題である。

労働の価値は労働の維持と再生産に必要な生計財の価値に等しい。

これに対して、マルクスが辿り着いた解答は、「労働の価値とは労働力の価値を表す不合理な表現」（『資本論』第 1 巻／第 17 章、ドイツ語原典 564 頁）という点にあり、マルクスは、上記の命題の空虚さ、つまり「労働（...）の価値は労働（...）の維持と再生産に必要な生計財の価値に等しい。」の（...）という空白部分を見えるようにしてくれるという。

アルチュセールは、これらの欠落、これらの空白を「見えるようにしてくれるのはマルクスである。けれども彼がそうすることで見えるようにしてくれることは、古典派のテクスト自身がそれを言わないで言うこと、それを言いながら言わないことである。」（『資本論を読む　上』（ちくま学芸文庫、36 頁））としている。

このようなマルクスの古典経済学の読み方、その第二の読み方をアルチュセールは「徴候的読解（読み方）」と呼んでいるのである。

《徴候的読解》

この読み方を、われわれはあえて「徴候的」読み方と言いたい。というのは、この読み方は、ひとつの同じ運動によって、それが読むテクスト自体のなかに隠されているものを暴きだし、それを別のテクストに結びつけるからである。この別のテクストは、最初のテクストのなかに必然的不在のかたちで現前しており、しかし徴候の資格で、最初のテクストによってそれ自身には見えないものとして生産された不在の形で現前している。マルクスの第二の読み方は第一の読み方とまったく同じように、たしかに二つのテクストの存在を、そして第二のテクストによる第一のテクストの測定を前提している。けれども、この新しい読み方を古い読み方から区別するものがある。それは、新しい読み方では、第二のテクストがすでに第一のテクストのなかに、少なくとも可能態としてあり、見えないテクストがすでに読みうるテクストのなかにそれ自身には見えないものとして含まれている、とい事実である。ここでもまた、少なくとも理論的テクスト（ここではこれらのテクストの読み方だけを問題にしている）に固有のジャンルのうえに、理論的言説の二重底に根拠を置く、二つの軌道面での同時的な読み方の必然性と可能性が現われる。

（Ibid、49-50 頁）

さて、このような「徴候的読解」は、アルチュセールの哲学における基本的方法のように見受けられるが、果たしてそれは真の意味で方法足り得ているのだろうか。しばしば「徴候的読解」はデリダが示した「脱構築（déconstruction）[5]」と類比的に語られてもいる。実際、マイケル・スプリンガーによるデリダへのインタビューでは、その終盤で次のような質問が投げかけられている。

> さて、一度アルチュセールを読み、そしてあなた（デリダ[6]）を読んでみると、彼が「徴候的読解」と呼んでいるものと、あなたが採用もしくは提唱しておられるような種類の読解の手続きを相互に区別するのが難しくなってきます。アルチュセールの「徴候的読解」は一つの方法のようなものだと思います。「方法」というものを、いわゆる発見的（heuristic）な方法をも含むようなやや緩やかな意味、つまりアリストテレスが、修辞学は方法化可能であると言ったような意味で理解すればの話ですが。（中略）可能な限り先鋭かつ単純な言い方（同時に最も誤った言い方かもしれませんが）をすれば、あなたが実践しておられる脱構築は（それが実行されうる限りで）、私がさきほど示唆した緩い意味での読解の方法ではないのでしょうか？脱構築はテクストを解釈し、再流動化させ、再配置するための方法ではないのでしょうか。（「政治と友情」ジャック・デリダ（インタビュー＝マイケル・スプリンガー）仲正昌樹訳、230-231 頁）

この質問に対するデリダの応答は否定的な響きが強いものであり、簡単に回答を見出せるものではないという趣旨の複雑なものである。その長大な回答全文を示すことはできないが、その中での代表的な言い回しを引用しておこう。

> それはやって来るのです（ça arrive）。そしてプラトンの言説の中で既に生じていたのです、恐らく別の形式、別の言葉によって。彼の言説の中には既に自己を閉鎖し、自己を形成、形式化することのできない一種の不適合性、不能さがあったのです――まさにそうした不適合性、不能さの次元において脱構築が作用していたのです。では、脱構築が既に至るところで――特に偉大なる哲学的言説の中で――作用し続けてきたのだとすれば、その脱構築がどうして今日、自らを形式化、主題化し、かつ名指そうとしているのか、しかもそうすることができないでいるのか。そうした疑問が出てくるでしょう。私は脱構築が形式化可能だとは思いません。「これ」が自らを形式化し、主題化し、この名において名指そうと試みているのです。この場合の優れた問いは、それが今日こういう形態を取り、こういう名前を持っ

---

[5] デリダによる「脱構築」は、一定の概念としては同定し難いものだが、一般的には、あるテクストがある事柄を伝える内容として読めるとき、それと矛盾する内容がテクスト中に含まれていることを示している。語源的にはハイデッガーの『存在と時間』において西洋の形而上学的伝統が論じられる際に使用されている「Destruktion」の仏語訳として『グラマトロジー』で採用されたデリダの造語である。デリダは、直訳の「解体 Destruction」がもつ破壊的で否定的な意味合いを避け、「脱構築 Déconstruction」（dé-「分離、除去」／construction「構築、建設」）とした。その意味で、脱構築はハイデッガーの試みの継承と言える。

[6] 『グラマトロジー』（現代思潮社『根源の彼方に　グラマトロジーについて　下巻』1983 年、足立和浩訳）第二部／第二章／常軌を逸したもの：方法の問題、34 頁～

ているのは何故か、というものでしょう。(Ibid、233 頁)

この部分の応答では、直接的にアルチュセールの「徴候的読解」に触れてはいないが、前後の文脈からすると、デリダは、アルチュセールの記述の中に、「徴候的読解」が彼の読者にある種の「方法」として位置づけられてしまうような事態が生じてしまうこと自体に(事実、マイケル・スプリンガーがそう読み取ったように)、方法論的な不徹底さを嗅ぎ取っているようにも読める。

3.2 問題設定/問題の構造(problématique)と認識論的切断/断絶(coupure épistémologique / rupture épistémologique)

『マルクスのために』に収録された論文の中で最も早い時期に発表された「フォイエルバハの『哲学的宣言』」(1960 年 12 月)の中で、既に「プロブレマティック(問題設定/問題の構造)」という用語は多用されている。

フォイエルバハは青年ヘーゲル派の運動の理論的成長の危機の証人であり、担い手である。1841 年から 1845 年における青年ヘーゲル派のテクストを理解するためには、フォイエルバハを読む必要がある。それによって、とりわけ若きマルクスの著作が、どこまでフォイエルバハの思想に浸透されているかを知ることができる。単に 42 年から 44 年にかけてのマルクスの用語法が、フォイエルバハ的(疎外、類的人間、全体的な人間、主語の述語への「転倒」等々)であるだけでなく、おそらくいっそう重要なことであるが、この時期のマルクスの哲学的なプロブレマティックの根本がフォイエルバハ的なのである。『ユダヤ人問題』や『ヘーゲル国家哲学の批判』のような論文は、フォイエルバハ的プロブレマティックの文脈においてはじめて理解できるものである。たしかにマルクスの考察の主題はフォイエルバハの直接的な関心事を越えている。しかし理論上の図式とプロブレマティックは同じものである。マルクスが自分の表現方法をとりもどすために、このようなプロブレマティックを真に「清算」したのはようやく 1845 年になってからのことである。『ドイツ・イデオロギー』は、フォイエルバハの哲学とその影響からの意識的、決定的な断絶をしめす最初のテクストである。(「フォイエルバハの『哲学的宣言』」、平凡社ライブラリー『マルクスのために』、69-70 頁)

このように、アルチュセールがアルチュセールとして語り始めた初期の論文においてさえ、既に「プロブレマティック」の概念は胎動を始めている。また、「若きマルクスについて」では、以下のようにも記している。

プロブレマティックという概念のもとに、ある限定されたイデオロギー的思想の統一性（それは直接に一つの全体としてあたえられ、明確に、あるいは暗黙のうちに一つの全体として。「全体化」の一つの意図として「生きられる」ものである）を考察することは、その思想のあらゆる要素を統一する典型的な体系的構造を明確にすることを可能にすることである。したがってそれは、この統一性によって、ある限定された内容を明らかにするものであり、その内容は、考察されるイデオロギーの「諸要素」の意味を理解させると同時に、このイデオロギーを、おのおのの思想家が生きる歴史的な時代によってその思想家にあたえられ、あるいは課せられる問題と関連させることを可能にする。（「若きマルクスについて」、Ibid、102-103 頁）

一方、「認識論上の切断」という概念が明確な形で最初に姿を現すのは、1963 年 8 月『パンセ』に発表された「唯物弁証法について」においてである。アルチュセールは、そこで理論と実践（プラティーク）との関係において、理論の意味を「実践の種差的な形式」であり、人間社会の「社会的実践の複合的統一体」に属するものとして捉えるところからそれをとり出してくる。

理論的実践（理論プラティーク）は、実践の一般的定義にふくまれる。それは、他の実践、「経験的」であれ、「技術的」であれ、「イデオロギー的」であれ、そういう実践によってあたえられる原材料（表象、概念、事実）に働きかける。もっとも一般的なかたちでは、理論的実践は、科学的な理論的実践だけでなく、前科学的な、つまり「イデオロギー的な」理論的実践（ある科学の前史を構成する「認識」の諸形式と、それらの「哲学」）をも包括する。〔だが〕ある科学の理論的実践は、その科学の前史におけるイデオロギー的な理論的実践からいつも明白に区別される。というのは、この区別は理論上そして歴史上、「質的な」不連続という形式をそなえるからであって、その不連続を、バシュラールとともに「認識論上の切断」と呼ぶことができる。（「唯物弁証法について」、Ibid、291 頁）

しかし、これらはいずれもアルチュセールが創出した概念ではない。『マルクスのために』の序文（したがって同書掲載論文の中で最後に書かれた論文、1965 年 3 月と末尾に記されている）である「今日的時点」の中で、アルチュセールは、これらの概念がどこに由来するのかを示すとともに、この二つの概念こそが彼のマルクス研究の中心に位置していることを示している。

マルクス主義哲学の種差の問題は、こうして、マルクスの知的発展のうちに、哲学の新しい概念の出現をしめす認識論上の切断が存在したかどうかを知るという問題、ひいてはこの切断の正確な位置に関連する問題という形をとった。マルクスの青年期の著作の

研究が、決定的に理論的（切断は存在するか？）また歴史的（切断の位置はどこか？）重要性をもったのはこの領域においてである。

もちろん、切断の存在を立証し、その位置を定めるためには、マルクスがこの切断（「われわれの過去の意識の清算」）について証言し、それを 1845 年の『ドイツ・イデオロギー』の段階に位置づけている言葉を、否認するにせよ確認するにせよ、吟味されるべき宣言としてうけとる以外になかった。この宣言の資格を立証するためには、理論と方法を必要とした。――すなわち理論構成一般（哲学的イデオロギー、科学）の現実性を考察することのできるマルクス主義理論の諸概念をマルクス自身に適用する必要があった。理論構成の理論なしには、じっさい、異なった二つの理論構成を区別する種差をとらえ、決定することはできない。この目的をはたすためにわたしは、ジャック・マルタン[7]から一つの理論構成の種単位、したがってその種差の妥当領域をしめすプロブレマティックという概念を借り、またガストン・バシュラールから、一専門科学の形成についての現代の理論的なプロブレマティックの変容を考えるための「認識論上の切断」という概念を借りることができると信じた。一つの概念をつくり、他の概念を借りる必要があったとしても、だからといってこの二つの概念がマルクスにたいして恣意的あるいは外在的であったことを意味するものではけっしてなかった。それどころか、この二つの概念は、たといその現存が多くの場合、実践的な状態にとどまっているとはいえ、マルクスの科学的思考の内部に現存し、作用していることが証明できるのである。この二つの概念によって、わたしは、青年マルクスの理論的変化の過程の適切な分析を可能にし、いくつかの厳密な結論に

[7] Jacques Martin(1922-1963)：『マルクスのために』が捧げられたジャック・マルタンについては、ヤン・ムーリエ・ブータンの『アルチュセール伝』が「ジャック・マルタンという謎」という一節を割いて、その生涯を略述している。ブータンはそこで次のように記している。「ミシェル・フーコーとルイ・アルチュセールという、たがいに相違点はあるものの、ともにすぐれた、それでいて脆い精神の持ち主にとって、ジャック・マルタンは挫折した影の部分、彼らもまたそうなっていたかもしれない姿を写しだす鏡のような存在だった。このふたりが旗印として掲げ、ときには盾にもした「著作なき」神話的哲学者、それがジャック・マルタンだ。」(『アルチュセール伝』、595 頁）同書によると、マルタンはアルチュセールが哲学を通して得た無二の親友だった。マルタンは、アルチュセールより 4 歳年下のノルマリアンで、同級にはジャン＝ピエール・リシャールがいた。ドイツ語に秀でており、戦前はカントに傾倒していたが、戦争中はフランクフルトで勤労動員の印刷工として過ごし、その間、ヘーゲルを集中的に読み、やがてマルクスへと至る。戦後、ノルマルに復帰した時にはマルタンはヘーゲル主義的マルキストになっていたという。このマルタンに、メルロ＝ポンティも注目し、彼を「知のプリンス」と呼んでいた。この時期、マルタンはヘーゲルの『キリスト教の精神とその運命』を仏訳（1948 年、ヴラン社からイポリットの序文を付して出版されている）しており、それによってアルチュセールに強くヘーゲルを印象づけ、アルチュセールをヘーゲルの研究へと導いたようでもある。マルタンの学位論文は「ヘーゲルにおける個人の概念」というタイトルで、アルチュセールと同様、バシュラールの指導下で書かれている。しかし、マルタンは 1948 年、1949 年と続けて教授資格試験に失敗。友人たちの求職斡旋も受け付けず、経済的に困窮する中で翻訳の仕事のみ引き受けていたという。彼が翻訳したものとして同書で紹介されているのは、エルンスト・ヴィーヒルトの『無名のミサ』とヘルマン・ヘッセの『ガラス玉演戯』である。そして、マルタンは 1963 年 9 月に自殺している。マルタンの死に際して、アルチュセールは 20 行ほどの、短いが深刻な追悼文を寄せている。

達するために必要不可欠な最小限の理論を手に入れることができた。（「今日的時点」、Ibid、46-48 頁）

マルクス主義哲学者アルチュセールがこの時期取り組んだ研究は、マルクスの青年期の著作の研究であり、それがフォイエルバハの読書へと導き、同時に、ヘーゲル哲学とマルクス哲学の関係の考察へと赴かせる。端的にいって、アルチュセールは、『ドイツ・イデオロギー』と『フォイエルバハに関するテーゼ』に、それらが著される以前と以後とで、マルクスのプロブレマティックが、全く異なる様態に変容する「認識論上の切断」点を見出しているのであり、その切断を通して、マルクスの哲学及び科学における理論上の革命を見出そうとしているといっていい。

アルチュセールは、マルクスの理論的な著作年代の区分を表 1 のように設定している。

表 1　アルチュセールによるマルクスの著作年代区分

1840 年～1844 年	青年期	自由主義的合理主義（1840～1842 年）
		共同体的合理主義（1842～1845 年）
1845 年	切断期	
1845 年～1857 年	成熟期	
1857 年～1883 年	円熟期	

アルチュセールがこのようなマルクスの著作年代区分を設定し、『ドイツ・イデオロギー』と『フォイエルバハに関するテーゼ』に「認識論的な切断」を見出そうとしたのは、「マルクス主義理論の還元不可能な種差」（Ibid、58 頁）を定義することを目指したからである。アルチュセールはそのために必要とされる要件を以下のように列挙し、そこにマルクス主義の哲学的使命を見出そうとしている。

こうした定義はマルクスのテクストのなかで直接に読むことはできないこと。円熟期のマルクスに固有の概念のありかを確認するためには、批判的な予備作業がぜひとも必要であること。これらの概念の識別は、これらの概念が存在する場所の識別と一体をなしていること。あらゆる解釈に絶対的に先行する予備作業であるこの批判的作業は、それ自体、理論構成の性質とその歴史にかんする最小限の暫定的なマルクス主義的理論概念を用いることを前提とすること。マルクスの読み方は、したがってさまざまな理論構成とその歴史の他とは異なる独自な性質についての一個のマルクス主義理論、すなわちマルクス主義哲学そのものにほかならない認識論的歴史の一理論を予備条件とすること。この操作は、それ自体、必要不可欠な円環を構成し、そこではマルクス主義哲学をマルクスに適用することは、マルクス理解の絶対的な予備条件であり、また同時にマルクス主義哲学の構築と発展の条件としても現れること、これは明白なことである。（中略）マルクス主

義はそれ自体、認識論の問題の対象でありうるし、またそうでなければならないということ、さらにこの認識論の問題は、マルクス主義理論のプロブレマティックとの関連においてのみ提起されうるということ、このことは単に歴史科学（史的唯物論）としてのみならず、また同時にさまざまな理論構成の性質とその歴史を解明できる、つまり自分自身を対象とみなすことによって自分自身を解明することができる哲学として、自己を弁証法的に規定する一個の理論にとってまさに必然である。マルクス主義はこうした試みに理論的に立ちむかう唯一の哲学である。（Ibid、58-59 頁）

さて、ここまでアルチュセールにおける「プロブレマティック」と「認識論的切断」という概念がどのように提示されてきたかのアウトラインを眺めてきたが、これらの概念を用いるアルチュセールが、当時の文脈においてどのような状況下に置かれていたのかを見ておく必要もあるだろう。

『マルクスのために』の「今日的時点」の前半は、まさに当時（1965 年）のアルチュセールが、その時点に至るまでの自らの航跡と状況を語っている部分である。アルチュセールは『マルクスのために』に収録されたテクストはいずれも自分の年代において、「マルクスを通して思考しようと試みたすべての哲学者」（Ibid、27 頁）が追い込まれた理論の袋小路から脱出しようとした試みの証言だと述べている。そこでアルチュセールは、フランス共産党への入党や、それ以後の政治的行動の記憶、さらにはフランス共産党成立の前史たるフランスの労働運動の歴史における理論研究の欠如や、フランスの哲学史における唯心論的傾向にも言及している。

ポリツェル[8]、オーギュスト・コルニュ[9]、サルトルといった乏しき先駆者の名を掲げながら、指導者の欠如を語り、「ブルジョワ出身の知識人たちが、みずから負っていると考えた、プロレタリアに生まれなかったという想像上の《負債》」（Ibid、37 頁）についても語っている。そのようなアルチュセールらが辿り着いたのが、「哲学の終焉」という考えであり、「われわれはそこで哲学に、哲学にふさわしい死、つまり哲学的な死をあたえられるように努力

---

[8] ジョルジュ・ポリツェル（Georges Politzer、1903 年 5 月 3 日 - 1942 年 5 月 23 日）は、ハンガリー出身のフランスの哲学者・心理学者・共産主義者。パリ労働者大学（Université Ouvrière de Paris）の講師でもあった。1942 年 3 月 20 日、ヴィシー政権下のフランスでナチスに逮捕され、殺害された。アルチュセールは、1949 年頃、彼の名を冠したポリツェル・サークルをエコール・ノルマル内に立ち上げ、その名のもとに幾度か労働運動の歴史に関する講演会を開いているようだ。ポリツェルには以下の著作がある。
『哲学の基本的諸原理』（Principes élémentaires de philosophie）
『哲学の根本問題』（Principes fondamentaux de Philosophie）　日本語版は『哲学入門』
『具体的心理学評論』（Revue de Psychologie Concréte）
寺内礼/富田正二訳『精神分析の終焉 ― フロイトの夢批判論』三和書籍

[9] オーギュスト・コルニュ（Auguste Cornu、詳細不明）『カール・マルクス、人と作品――ヘーゲル主義から史的唯物論へ、1815-1845』（アルカン社、1934 年）の著作がある。アルチュセールの「若きマルクスについて」はコルニュに捧げられている。また、「コルニュのことをアルチュセールに教えたのは、ジャック・マルタンである」とブータンの『アルチュセール伝』の注に記されている。

した。われわれはそこでもういちどマルクスの他のテクストに、さらには前述の初期論文の第三の読み方に、よりどころをもとめた。われわれは、『資本論』の副題が「経済学」にかんして表明しているように、哲学の目的は、批判以外ではありえない、すなわち事象そのものにむかい、哲学的なイデオロギーと縁を切り、そして現実の研究をはじめなければならないと考えるようになっていった。」（Ibid、41 頁）と記している。

今村仁司は、このようなアルチュセールが置かれていたマルクス主義の論争的状況を次のように整理している。

++　アルチュセールの仕事が登場するまでは（60 年代の前半まで）、マルクス解釈は二つに分裂していた。一方にはソ連を中心にして形成され、全世界を席巻してきた「正統マルクス主義」（別名、マルクス＝レーニン主義、あるいはスターリン主義）があり、他方には、「歴史の主体」を存在論的基礎とするマルクス主義、当時の言葉遣いでいうと「主体派マルクス主義」があった。主体性論を強調する立場のほうも更に枝分かれして、個人的主体を強調する「実存主義的マルクス主義」（サルトルなど）と集団的主体（「プロレタリアート」）を「歴史の主体」とするマルクス主義思想（コルシェやルカーチの流れを汲むものたち、例えばルフェーブルやゴルドマンなど）があった。アルチュセールの仕事は、これら複数のマルクス主義の諸形態を一挙に覆す。（今村仁司『アルチュセールの思想』講談社学術文庫、1993 年 8 月、新版序論　アルチュセールのアクチュアリティー、17 頁）

今村によると、そういった中で提起されたアルチュセールの「認識論的切断」（今村は「認識論的断絶」という言い方を採用している）という概念は、それまで流布されていた「初期マルクス」という捉え方は、思想の構造においてはヘーゲルとフォイエルバッハを巧みに結合した過渡期の思想形態であり、アルチュセールは、そこに「いつマルクスは本来の（理論的）マルクスになったのか」という問いを投げかけた。したがって、アルチュセールの問いかけは、それまで全く吟味されてこなかった、「マルクスの哲学と科学」をはじめて検討の対象としたというのである。

++　これまでのマルクス主義は、マルクスの哲学を「唯物論的」なる形容詞をつけただけの「ヘーゲル哲学」で満足してきたのであり、マルクスの「社会と歴史の科学」を無批判的に「批判的経済学」と呼んできたにすぎない。本当のところ、マルクスの哲学は、「唯物論化されたヘーゲル」であろうとそうでなかろうと、ヘーゲルとは別物ではないか、またマルクスの「科学」はおよそ「経済学」などではなくて、まったく新しい「歴史の科学」ではないのか。もしそうだとすれば、そうした哲学と科学はマルクスの思想的経歴のなかで「いつ、どこで」生誕したのか。これが「認識論的断絶」論で賭けられた問題であった。（Ibid、18 頁）

一方、エチエンヌ・バリバールは、アルチュセールのこのような思考の背景には、マルクス主義そのものと、「科学史」と「認識論（épistémologie）」という二つの作業分野との遭遇があったとして、アルチュセールのプロブレマティックと、アルチュセールが「認識論的切断」という概念を借り受けたとされているバシュラールのプロブレマティックのあいだには、単純な流用ではない形態変化（転義）が生じていることを指摘している。

バリバールによれば、バシュラールは「認識論的切断（クピュール）」について論じていないばかりでなく、「認識論的断絶（リュプテュール）」についても多くを語っていない。バシュラールが様々なメタファーを介しつつも、唯一拘泥しているのは、「不連続性」の観念であるとされている[10]。

++　バシュラールの立場（ポジシオン）（科学的客観性の定立（ポジシオン））のなかで、「断絶」という唯物論的な要素が働いているからこそ、アルチュセールは、同時代のマルクス主義のただなかでつづけられている、唯物論対観念論の闘争に介入してゆけるのです。（中略）バシュラールは、数学という科学分野を特別視したために、当の領域を排除してしまったのですが――ほかでもない、この領域で、アルチュセールは「断絶」というバシュラールの概念の射程を例のごとく拡張してゆき、そして、ただそれだけのことで、バシュラールの唯物論的な要素をいちだんと強固なものに変えるのです。つまりバシュラールでは、数学（それと、数理物理学）を特権化することにともなう、理想化〔＝認識にさいして純粋な対象を構成すること〕の傾向がみられるのにたいし、アルチュセールでは、この傾向が一気に払拭されるということです。エチエンヌ・バリバール『アルチュセール　終わりなき切断のために』（福井和美編訳、藤原書店、1994 年 10 月）52 頁

しかし、このような転義による借用を行ったが故に、その時点のアルチュセールは、バシュラールのプロブレマティックがはらむ諸矛盾の検討をスキップしてしまい、バシュラールが確定したはずの唯物論と観念論の境界を明確に捉えることができなくなってしまったというのである。どういうことか。

++　つまり、マルクスという「認識論的切断」を思考できるようにするためには、アルチュセールは、マルクスという「認識論的切断」の、その形態を先取る必要がある。だが、その形態を先取るには、（エンゲルスがラヴォアジェとマルクスを突きあわせた、あの有名な対比にしたがって）数学、物理学、化学における典型的な認識論的切断を援用しなくてはならないわけです。すると、このとき、「バシュラール」とは、この先取りを支えるための無批判な「保証」であることになります。（Ibid、54 頁）

---

[10] エチエンヌ・バリバール『アルチュセール　終わりなき切断のために』（福井和美編訳、藤原書店、1994 年 10 月）20-22 頁

バリバールは、そこで問題となってくるのがイデオロギーとプラティークの双対であり、アルチュセールが要求しているのは「個別科学についての歴史理論が、〈存在〉と〈無〉の哲学、および〈真理〉と〈誤謬〉の哲学に共通する観念論に、いっさい染まらないようにするために、これらの双対から、〈無〉および〈誤謬〉という項を根こそぎ排除すること、そして、個別科学の構成という問題全体を、個別イデオロギーについての（歴史的）唯物論的な理論という場へ移し替えること。」(Ibid、58 頁）であり、その要求をアルチュセールの言説自体に当てはめてみる必要があるとしている。

バリバールのアルチュセール論についていくには、今少しアルチュセールを読み込んでいく必要があるが、デリダのアルチュセール批判はもう少しわかりやすい。アルチュセールの「認識論的切断」を通したマルクスの読解に対して、デリダは以下のような異議を申し立てている。

> JD：私にとってマルクスは、その当時考えられていたよりもずっと広範な、より本質的な意味においてヘーゲルの後継者だったのです（当時のマルクスがその程度にしか理解されていなかったのは、誤解でなければ、否認によるものでしょう）。私がヘーゲルに関連して練り上げ、当時（いろんな箇所で：とりわけ『「幾何学の起源」への序論』『差延』『人間の（さまざまな）終焉＝目的』『竪穴とピラミッド』[11]で）定式化しつつあった問いは、マルクスにも関わる問いであると思っていました。このパースペクティブから見て、私は当時（バシュラールの概念を導入する形で）「認識論的切断」と呼ばれていたものに確信を持てませんでした。実際に二人のマルクスがいたのだ、という確信が持てなかったのです。依然として人間主義的、人間学的、余りにヘーゲル主義的かつ余りにフォイエルバッハ主義的な形而上学者であり、パリ草稿の著者であるマルクスと、全ての目的・終末論から解放された科学主義的なマルクス。ご存じのように、アルチュセールの全ての言説、加えて当時のアルチュセール主義者たちの言説において、この区別がマルクス像を体系化するうえで重要な役割を果たしていました。マルクスを素朴に読んだだけでは、その点に納得がいきませんでした。「そうさ、マルクスのテクストも他の全てのテクストと同じで、異種混交しているんだ」、と自分では思っていたのですが、私がそうした異種混交性（heterogeneity）、非対立的差異（non-oppositional difference）から読み取った（そして今でも拘り続けている）意味は、切断という概念とは相入れないように思えました。逆説的なことに、切断は境界線を挟んで対立している両側を同質化し、最終的には、相互に同化させることになります。この対立を通しての同質化（homogenization）こそが、弁証法の狡知なのです。（「政治と友情」ジャック・デリダ（インタビュー＝マイケル・スプリンガー）仲正昌樹訳、188-189 頁）

ここでデリダは、アルチュセールの「認識論的切断」という作業仮設は、彼が想定しているテクストの異種混交性を振るい落としてしまう弁証法的な装置のように作動してしまう

---

[11] 『差延』『人間の（さまざまな）終焉＝目的』『竪穴とピラミッド』はいずれも『哲学の余白　上下』高橋允昭、藤本一勇訳（法政大学出版局　叢書・ウニベルシタス、2007 年 2 月）に収録されている。

といっている。また、デリダは次のようにもアルチュセールのマルクス読解を非難している。

> JD：彼のマルクス読解に従えば、言わゆる「良き」マルクスは、新ヘーゲル主義の形而上学、人間学、云々を乗り越えて、最終的に理論的・科学的問題系に到達するマルクスである、ということになると思います。しかし私は、理論という観念、客観＝対象性という観念について、歴史的な（historical）、あるいは「歴史に関わる historial」数々の問いを立てねばならないと思いましたし、今でもそう思っています。そうした観念はどこからやって来るのか。客観性の価値はどのように構成されているのか。どのようにして、ヨーロッパの哲学史の中で理論が支配的になっていったのか、という問いです。こうした、言ってみれば科学、対象性についての系譜論的な問いが、アルチュセールの言説の中で立てられたことはなかった、少なくとも私に満足がいくような仕方で立てられたことはなかった、と思います。そういうわけで、彼のマルクス読解の本質は、悪いテクスト、言い換えれば、前マルクス的テクストをふるい落としたうえで、マルクス主義的なテクスト―断絶後のマルクスのテクスト―を形而上学の嫌疑を越えた不可侵のテクストとして参照することにあったのではないかと思えたのです。思考の秩序の問題と、系譜論的な問いに関する私のためらいは、やはり同様の経緯、同様の理由から（少なくとも潜在的には）政治的なためらいでもあったのです。というのは私自身、問いかけや思考の要求の制限からは、決して良き政治は生まれてこないと思っているのです。ただし、私の留保が常に抗議だったわけではありません。（中略）私が問題にしたいのは科学的な公理系ではなく、思考の公理系です。私にとっては、哲学的あるいは科学的なものと、私が思考と呼ぶものの間の区別が―この区別が見かけほどハイデッガー的になってしまわない程度に―残されているのです。だから私には、アルチュセールとアルチュセール派の人たちの言葉は、少々窮屈だと思えたのです。私はそこに新しい科学主義を感じたのです。更に言えば、「客体＝対象とは何か？　客観性あるいは理論的なものの価値はどこから来るのか？」、という問いの可能性を抑圧する、洗練され、抑圧された新たな（こういう言い方をすれば彼らは絶叫していたことでしょうが）「実証主義」を感じたのです。（Ibid、190-191 頁）

アルチュセールらが主張する「良きマルクス」「真正のマルクス」という主張は新たな衣をまとった「科学主義」や「実証主義」に過ぎないのではないかという批判である。実際、今日の時点から顧みて、この時期のアルチュセールの言説に、認識論的切断後のマルクスの言説や、認識論的切断自体を保証するバシュラールの言説が絶対化される傾向がなかったとはいえないようにも思われるが、いかがであろうか。

3.3 重層的決定/規定（surdétermination）

「矛盾と重層的決定」でアルチュセールが問題としているのは「弁証法」である。そして、その問題は、「マルクス主義の哲学的発展」にとって死活にかかわる問題であるとされている。アルチュセールは、マルクスの『資本論』第 2 版の後記の「弁証法はヘーゲルにあっては逆立ちしている。その神秘的な外皮のなかに合理的な核心を見出すためには、それを転倒しなければならない。」という言明が何を意味しているのかについて、ドイツ語の原典に遡ってテクスト解釈を行い、以下の結論を導き出している。

> はっきり言うと、このことは、否定、否定の否定、反対物の一致、「超越（デパスマン）〔止揚〕」、質から量への転化、矛盾等々といった、ヘーゲル弁証法の根本的構造は、マルクスにおいては（マルクスがそれらのものをとりあげるかぎりにおいて――マルクスはかならずしもつねにそれらをもちいなかった！）、それらがヘーゲルにおいてもつ構造とは異なった構造をもつことを意味する。このことはまた、これらの構造的な差異を明らかにし、記述し、規定し、思考することが可能であることを意味する。（「矛盾と重層的決定」、『マルクスのために』、155 頁）

アルチュセールは、ここから「矛盾についてのマルクス主義的概念」の考察に赴く。そして、そこで検討の対象となっているのは、レーニンによるロシア革命の考察である。

レーニンは、革命はなぜロシアで可能であり、ロシアで勝利をおさめたのかを問い、そこにロシアそのものを越えた理由、すなわち帝国主義戦争[12]の開始とともに、人類が「客観的に革命的な状況[13]」に突入した点を指摘している。レーニンの記述を丹念に追いながら、アルチュセールは、帝国主義戦争のみならず、1905 年の挫折した革命[14]にその「ただ一国において当時可能であったあらゆる歴史的矛盾の集積と激化」（Ibid、158 頁）を見て取っており、レーニンがいうように、帝国主義諸国家を構成したヨーロッパ諸国という鎖の連なりの中で、最も弱い輪であったのがロシアだった点を見出している。

このレーニンの記述の中からアルチュセールが見出した「歴史的諸矛盾の集積と激化」に

---

[12] ここでは第一次世界大戦を指す。

[13] 人類全体を袋小路に追いこみ、幾百万の人間をさらに死滅させ、ヨーロッパ文明を絶滅させるか、それともあらゆる文明国における権力を革命的プロレタリアートに譲りわたし、社会主義革命を達成するか、というディレンマの前に立たせたのは、帝国主義戦争によって結合された客観的諸条件である。（レーニン、フランス版著作集　第 23 巻、400 頁）

[14] ロシア第一革命、1905 年に発生した「血の日曜日事件」を発端とするロシアの革命。第 1 次革命とも言い、第 2 次革命（第二革命）は二月革命を指す。特定の指導者がいた訳ではなく、原因や目的が入り組んだ複数の革命団体によって、反政府運動と暴動がロシア帝国全土に飛び火した。騒乱は全国ゼネスト、戦艦ポチョムキンの反乱などで最高潮に達したが、憲法制定や武力鎮圧で次第に沈静化し、ストルイピン首相の 1907 年 6 月 19 日のクーデターで終息した。

おいて、アルチュセールはマルクスの弁証法の駆動因たる矛盾の形態と、それが重層的に決定されていることを見出す。

「諸矛盾」、その幾つかは根本的に異質であり、また、すべてが同じ起源、同じ方向、適用の同じ水準と同じ場所をもつとはかぎらず、しかしながら「融合されて」一個の統一された破壊力となる。あの「諸矛盾」の驚くべき集積が、この状況のなかで、一体となって活動しはじめるとき、もはや一般的な「矛盾」の単一の単純な効能について語ることはできない。（中略）これらの諸矛盾は、矛盾の項目の一つであり、同時に矛盾の存在条件でもある生産関係に依存し、また上部構造、つまり生産関係に由来するとはいえ、独自の堅固さと効力をもつ審級に依存し、さらには特殊な役割を演じる決定因として介入する国際的変動それ自体に依存する。つまり、活動中の諸審級のそれぞれを構成する「差異」（これはレーニンが語る「集積」のなかに現われる）は、かりにそれが現実的な統一性のなかに「融合」されるとしても、ある単一の矛盾の内的統一性のなかでの一個の純粋な現象として「消え失せる」ものではない。それらの「差異」が革命的切断というあの「融合」のうちに構成する統一性は、それらの差異に固有の本質と有効性にもとづいて構成されるのであり、それらの差異が何であるかによって、また、それらの作用の特殊な様式のいかんによって構成される。これらの差異は、この統一性を構成することによって、これらの差異に活動力をあたえる基本的な統一性を再構成し実現するのであるが、そうすることで統一性の本性をもしめすことになる。すなわち「矛盾」は、矛盾がそのなかで作用する社会全体の構造から切り離すことができず、また存在の形式的な諸条件、およびそれが支配する諸審級からも切り離すことができない。したがって矛盾それ自体は、その核心においては、それらによって影響され、同じ一つの運動のなかで、決定するものであると同時に決定されるものであり、それが活動力をあたえる社会構成体のさまざまな水準とさまざまな審級によって決定されるものである。それゆえ、われわれは矛盾は、原理的に言って重層的に決定されると言うことができる。（Ibid、163-165 頁）

アルチュセールは、この矛盾が「重層的決定」のもとにあるという言い方（用語）を使用するのは、この言い方が、「ヘーゲル的矛盾」とは全く別のものを問題としている点を、かなり良く示すことができているからだという。

アルチュセールは、ヘーゲルの『精神の現象学』及び『歴史哲学』に言及しながら、ヘーゲルが描き出す歴史的変容の諸現象が、矛盾という単一の概念のなかで考えられており、マルクス、そしてマルクスを学んだレーニンが現実に見出した「諸矛盾」とは決定的に異なるものであることを指摘している。ヘーゲルにおける矛盾は、ヘーゲルにおける「全体性[15]」

[15] 「全体性」批判については、レヴィナスの『全体性と無限』（1961 年）を忘れることはできないが、アルチュセールが同書を読んでいたかどうかは不明である。多分、この時点では読んでいなかったのではな

という内的統一原理に、本来、歴史社会が孕み持つ無限の多様性が還元されてしまっているというのだ。そして、ヘーゲルの「矛盾」は、その「全体性」という内的統一原理の外化-疎外という抽象的なイデオロギーを反映させた結果に過ぎないと処断されている。

> したがって、本質的な問題を正しく提起するためには、歴史的変容の諸現象がヘーゲルによって矛盾というこの単一の概念のなかで考えられているのはなぜかということを問いさえすればよい。ヘーゲル的矛盾の単一性は、じっさい、あらゆる歴史的な時代の本質を構成する内的原理の単一性によってのみはじめて可能になる。全体性、つまり所与の歴史社会（ギリシア、ローマ、神聖帝国、イギリス等々）の無限の多様性を、単一の内的原理に還元することが権利上可能であるという理由によって、こうして合法的に矛盾に付随するこの同じ単一性がそこに反映されうるのである。（中略）つまり歴史的世界の具体的な生をつくりだすあらゆる要素（経済的・社会的・政治的法律的諸制度、風俗、道徳、芸術、宗教、哲学、そして戦争や戦闘や敗北等々といった歴史的諸事件にいたるまで）の、一個の内的統一原理への還元は、それ自体、一民族の具体的な生のすべてを内的・精神的原理の外化-疎外 extéiorisation-aliénation（Entäusserung-Entfremdung）とみなすという絶対条件を付したときにのみ可能である。内的精神的原理の外化-疎外とは、けっきょく、この世界の自己意識の、その宗教的あるいは哲学的意識、すなわちそれに固有のイデオロギーのもっとも抽象的な形式以外の何物でもない。（中略）ヘーゲル的矛盾の単一性は、一民族の内的原理の、すなわちその物質的現実ではなくそのもっとも抽象的なイデオロギーの単一性の反映に過ぎないからである。（Ibid、168-169 頁）

このようにしてアルチュセールは、ヘーゲルの弁証法の駆動因たる「矛盾」は、ヘーゲルの内的統一原理という単一性の反映の結果に過ぎないものとしている。それゆえ、ヘーゲルは、《世界史》を単一の矛盾の原理の単純な働きであるヘーゲルの「弁証法」によって動かされるものとして提示することができるというのである。

では、アルチュセールが、マルクス、そして、マルクスに従いつつレーニンが示した「歴史的諸矛盾」に見出した「重層的決定」は、如何にして、マルクス主義における「弁証法」へと差し戻されるのか。

『資本論』第二版の後書きで、マルクスが「逆立ちしている」と表現した、ヘーゲルの弁証法は、マルクスによれば神秘化（アルチュセールは「欺瞞化」と解釈している[16]）されているので、マルクスは、そこから「合理的核心」を見出すためには、それを「ひっくり返す（転倒する）」必要があると記しているのだが、アルチュセールは、そこで、ヘーゲルの弁

いかと推測されるが、どうであろうか。因みに、ブータンの『アルチュセール伝』の索引中にはレヴィナスの名は見られない。

[16] 「矛盾と重層的決定」の原注 2 を参照。

証法が依拠する「矛盾」とマルクスが現実に見出す「諸矛盾」との種差性を際立たせ、そこに「重層的決定」という新たな概念を挿入してみせた訳である。

> だが、それならば、もしあらゆる矛盾が歴史的実践のなかで、またマルクス主義の歴史的経験にとって重層的に決定された矛盾として現われるとすれば、もしヘーゲル的矛盾にたいして、マルクス主義的矛盾の種差性[17]を構成するのがこの重層的決定であるとすれば、もしヘーゲル弁証法の「単一性」が、「世界観」とくにそれを反映する歴史観につながるのであれば、マルクス主義的矛盾の重層的決定の内容とはいかなるものであり、その存在理由は何であるかを尋ね、またマルクス主義的社会観がいかにしてこの重層的決定のなかに反映されうるかを知る問題を提出する必要がある。（Ibid、174 頁）

だが、アルチュセールの問題は正にその地点に始まるのであり、設問の道筋からすれば、アルチュセールは、「重層的決定」の内実を示す必要に迫られたはずである。なぜなら、この問いは、必然的にマルクスの「哲学」、マルクスの「方法論」＝弁証法に関する具体的な記述を要請しているからだ。だが、アルチュセールは、ここでは、その問いに明瞭に答えることはできていないように思われる。

アルチュセールが「矛盾と重層的決定」という論文で示しているのは、マルクスの「転倒」という表現の「解釈」であり、その言葉が実質的にはフィクションとして、マルクス主義の上に作動してしまったことである。つまり、アルチュセールは、マルクスの弁証法は、ヘーゲルの弁証法[18]の単純な「転倒」ではないと主張しているであり、マルクスが「転倒」という言葉を使ったことを説明することはできるものの、それはあくまでも比喩的に語られた

---

[17] この、アルチュセールが多用する「種差性（spécificité）」や「種差的（spécifique）」という用語は、論理学で、同一の類に属する多くの種において、ある種に特有で、それを他のすべての種から区別する特性や固有性を意味している。例えば、「動物」という類において、「人間」を他のすべての動物から区別する場合、「人間」に特有の「理性」などがそれに当たる。このような用例の起源は、アリストテレスの『形而上学』の規定に見出せる。「ディアフォラ〔差別、差別相、種差〕があると言われるのは、（一）それらのものが互いに異なるものではあるがなんらかの点で同じものである場合、すなわち、数的には同一でないが、しかしその種において、あるいはその類において、あるいは類比によって、同じであるものどもの場合と、つぎは、（二）その類が異なる（ヘテロン）もの、互いに反対のもの、そのほかおよそそれらの実体のうちに異他性（ヘテロテース）を有するものどもの場合である。」（アリストテレス『形而上学』出隆訳、岩波文庫　上巻、178 頁）

[18] アルチュセールは、『マルクスのために』に収録されている「「ピッコロ」、ベルトラッチーとブレヒト」という論文の中で、ブレヒトの劇作に触れながら、ヘーゲルの弁証法の不能性を以下のようにも語っている。「イデオロギー上のどのような意識形態も、みずからの内的弁証法によって自分の外に出るために必要なものを内包することは不可能である。厳密な意味で、意識の弁証法というものは存在しないこと。要するに、ヘーゲル的な意味でのどんな「現象学」も実現不可能であること。というのは、意識が現実に到達するのは、意識の内的な発展によるのではなくて、自分以外のものを根本的に発見することによるのだから。（「「ピッコロ」、ベルトラッチーとブレヒト」『マルクスのために』、248 頁）

言葉であり、マルクスの弁証法には、ヘーゲルのそれとは根本的に異なる決定的な種差があると言っているのである。アルチュセールが記述してみせるのは、ヘーゲルを転倒することでマルクスを生みだして見せるとする、それまでマルクス主義の中で行われてきた解釈のメカニズムの摘出である。それは経済主義や技術主義といった形で既存のマルクス主義の中で流布されてきた方法であり、それらは「ヘーゲル的モデルの亡霊」（Ibid、174 頁）に基づくかのような短絡的方法であるという批判となっているのである。

> ヘーゲルの用語の関係を転倒すること、すなわち市民社会と国家、経済と政治、ーイデオロギーといった用語を保持することであり、――だが、それは本質を現象に変え、現象を本質に変えることによってであり、あるいは《理性の巧知》を逆に働かせることによってである。（中略）このような企ては、ついには歴史の弁証法を、継起的な生産様式の発生の弁証法に、すなわち究極的には、さまざまの生産技術の発生の弁証法に、根本的に還元することになる。これらの誘惑（ヘーゲルの亡霊の誘惑：引用者注）は、マルクス主義の歴史において、経済主義（エコノミスム）、さらには技術主義（テクノロジスム）という固有の名称をもつものである。（中略）マルクスは社会にかんするヘーゲル的モデルの用語を、「転倒させ」ながら、維持することはなかったからである。マルクスはそれらの用語のかわりに、それらとは遠い関係しかもたない他の用語を用いた。それだけでなく、彼は、彼以前にこれらの用語のあいだを支配していた関係をくつがえした。マルクスにおいては、用語と同時にその関係が性質と意味を変えるのである。（Ibid、176～178 頁）

アルチュセールは、ここで例として、「市民社会」や「国家」という言葉が、マルクスにおいては、ヘーゲルにおけるそれと如何に遠く異なった形で提示されているかを示している。「ヘーゲルでは、国家は市民社会「の真理」であり、市民社会は《理性の巧知》の働きによって、国家のうちに成就された、国家に固有の現象に過ぎない。」（Ibid、181 頁）のに対して、「マルクスでは、経済と政治の暗黙の合致（現象-本質-・・・・・の真理）は消え、そのかわりにあらゆる社会構成体の本質をなす構造-上部構造の複合体における、規定的諸審級の関係という新しい概念が現われる。」（Ibid、181 頁）

そして、それらの用語の変化は、関係そのものの変化をもたらすことも指摘されている。また、ここではアルチュセールにおける「最終審級における決定」とその保持という厄介な問題もその顔を出しているが、その点はさておき、アルチュセールは「わたしとしては、ここで、経済的なものによる最終審級における決定に対する有効な諸決定（上部構造および、国内的、国際的な特殊な諸状況から生じる）の集積と呼ぶことのできるものをとりだすだけで充分である。」（Ibid、184 頁）とといいつつ、ひとまずの結論を述べている。多少荒っぽい言い方をすれば、アルチュセールがここで意図しているのは、マルクス主義弁証法の、ヘーゲル的原理、主題、そして方法からの切断といってもいいだろう。

ここにおいてはじめて、わたしが提起した重層的に決定される矛盾という表現が明らかになるように思われる。ここでというのは、われわれはこのときもはや重層的決定の存在という単純な事実をもつのではなく、その事実を、本質的なものとして、またたといわれわれのやり方がいまだ目安にすぎないとしても、その基礎にたちかえらせたからである。上部構造および国内的、国際的変動の諸形態が、大部分は種差的であり、自立的であり、したがって純然たる現象に還元できない現実的存在であることが認められるやいなや、この重層的決定は不可避的となり、思考可能なものとなる。そこでおわりまで進んで、次のように言わねばならない。すなわち、この重層的決定は歴史の一見して特殊な、あるいは異常な状況（たとえばドイツ）にかかわるものではなく、普遍的なものであり、経済的な弁証法はけっしって純粋状態で作用するものではなく、また《歴史》において見られることは、これらの上部構造、その他の審級が作用をなしとげたのちにうやうやしく遠ざかったり、あるいは《時》が来たために、《経済》陛下が弁証法の王道を進ことができるように、みずからはその純然たる現象として姿を消すなどということではけっしてないのである。最初の瞬間にせよ、最後の瞬間にせよ、「最終審級」という孤独な時の鐘が鳴ることはけっしてない。（Ibid、184-185 頁）

このように、アルチュセールが、マルクス主義が見出した諸矛盾に「重層的決定」という措辞を与えることで、思考の対象として浮かび上がらせようとしているのは、マルクスが明示的には提示していないが、『経済学批判序説』や『資本論』に埋め込まれている、マルクスの弁証法である。だが、それは具体的な記述としては示されていない。

「矛盾と重層的決定」の後に書かれた「唯物弁証法について」では、この点に関する批判として、G.ミリューと R.ガロ―ディーの批判が紹介され（原注 2)、次項で扱う理論的実践の問題を通して、マルクス弁証法の特性について再論されている。

理論的実践の問題については、後に触れることとして、「唯物弁証法について」の後半部で示されているのは、一つはヘーゲルとマルクスにおける「全体性」という概念の種差性であり、今一つはマルクス主義に固有の「状況（conjoncture[19]）」へのコミットメントである。

先に示したように、ヘーゲルの「全体性」については「矛盾と重層的決定」の中でも触れられているが、「唯物弁証法について」の「V　支配関係をもつ構造――矛盾と重層的決定」（『マルクスのために』344-369 頁）では、ヘーゲルの「全体性」は、「それ自体《理念》の発展の契機たる、ある単純な原理の単純な統一性の疎外された発展」（「唯物弁証法について」『マルクスのために』、348 頁）であり、「ヘーゲルの全体性のうちに現われるあらゆる具体的な差異は、その全体性のうちに見出される「諸領域」（市民社会、国家、宗教、哲学など）をもふくめて、肯定されるやいなや否定され」（Ibid）てしまい、ヘーゲルの「全体性」とい

[19] conjoncture は、「さまざまな状況の結びつき、情勢、局面、経済情勢、景気」といった意味を有している（白水社『ロワイヤル仏和中辞典』)。

う内的原理のまえでは、全ては疎外の契機として、均等化されてしまっている。それゆえ、ヘーゲルの「全体性」のもとでは、「あらゆる差異がそれ自体としてはけっして存在せず、表面だけ独立した存在であり、しも、それらの差異は、そこで疎外する内的な単純な原理の統一性しかけっして表さない」(Ibid、349 頁)。そうして、アルチュセールはヘーゲルの「全体性」のうちに、次の三つの特徴を読み取っている。

> ヘーゲルにおける全体性は、第一に、じっさいにではなく外見上「諸領域」に分節化されている。第二に、その全体性は、統一性として、その複合性そのものを、つまり、その複合性の構造をもたない。第三に、その全体性は、支配関係をもつ構造――ある現実的な複合性が統一性となることが可能であり、しかも、政治的実践のような、その構造の変化を意図するところの実践の対象に現実になることが可能となるための絶対的な条件――を欠いている。そこで、社会的全体性にかんするヘーゲルの理論が、けっして政治学を樹立しなかったことも、ヘーゲルの政治学が存在せず、存在しえないことも偶然ではない。（Ibid、349 頁）

アルチュセールがヘーゲルの「全体性」概念に読み取っているのは、いわば構造の不在である。ここで「支配関係をもつ構造」[20]として言及されているものこそがそれであり、それはマルクスが予め示していた原理、すなわち「社会関係のない生産は、どこにも実在しないという原理であり、そのかなたにさかのぼることのできぬような統一性とは、生産関係がその実在条件として生産そのものをもっている場合に、生産それ自体が実在条件として生産関係という形態をもっているような、ある全体のもつ統一性であるという原理」(Ibid、351 頁）に由来する、マルクスが見出した「諸矛盾」の実在条件になっているというのである。

そこにアルチュセールは、マルクス弁証法の「もっとも深遠な特色」(Ibid、352 頁）である「**矛盾自体の内部における、矛盾の実在条件のこうした反映、おのおのの矛盾の内部において複合的な全体なるものを構成している、支配関係をもって分節化された構造のこうし**

---

[20] 市田良彦は、そのようなアルチュセールが追い求めていたのは「状況の理論」であり、それを追及せんがために様々な構造主義的概念を構築しつつも、実際に構造の内的描写に踏み込むことはなかったとして、次のように記している。「六〇年代前半のアルチュセールの関心について確認しておこう。重層的因果性も構造的因果性も複合的全体も、さらに矛盾の移動と圧縮も、「状況の変異を説明する」ための概念装置にほかならなかった。一九一七年の革命、そして中国革命という、いずれもマルクス主義の古典的公式からすれば例外的な出来事――マルクス主義に反する革命――を説明するために、アルチュセールはマルクス主義理論を刷新しようと、そのために毛沢東を援用しつつ〈構造主義〉的な諸概念を作り上げた。例外的なものとして生起する「状況」を対象に、彼は毛沢東に範をとってマルクス主義理論を作り変えようとした。どれほど「全体構造」を強調し、構造による決定を説いても、彼は実のところ構造そのものがどのようであるか、諸要素の連関がどのようになっているかを構造言語学や構造人類学のように描写したことがなく、彼の〈理論〉はもっぱら、構造の作用や効果としての「変異」にしか関心を向けていなかった。」(市田良彦『アルチュセール　ある連結の哲学』平凡社、2010 年 9 月、29 頁）

た反映」(Ibid、351-352 頁）を見出している。アルチュセールの「重層的決定」という概念はここに向けられているのである。

さて、このアルチュセールが提示した「重層的決定」(仲正訳では「重層的規定」と訳されている）について、デリダは以下のような批判を加えている。

> JD：私が少なくともぼんやりと感じていたのは、資本主義的近代性によって、階級闘争の概念、そして社会階級の同定さえもが破綻したということです。アルチュセールの言説に見られるような社会階級、階級闘争を規定的に参照するやり方は、まるで別の時代のことであるかのように思えました。階級闘争の概念、そしてある一つの階級を同定することは、当時のアルチュセール派の人たちが考えていたよりも、はるかに大変な問題が絡んでいました。そういうわけで、「社会階級」という言葉が出てくる文は、私にとっては問題を孕んだ文でした。既に述べたような理由から、当時はこういう形で表現することはできませんでした。社会階級というものが、かなり茫漠とした形で存在しているとは思いますが、これほどたがが緩くなった概念から出発する政治戦略では、(第三世界のことは別として）産業社会の近代性にアプローチ、分析し、考察することはできません。19 世紀とは言わないまでも、少なくとも 20 世紀前半から継承している社会学的・政治的な分析モデルを未だに目の当たりにしているという印象を受けました。こうした視点から見れば、その後、何人かのアルチュセール派の人たち（バリバール、マシェリー、ランシエール）の言説によって切り開かれた道は、明らかに、私たちを相互により接近させることになりました。あの当時の極めて鈍感な言説よりも、今日のバリバールの言説と関心の方により親近感を覚えています。大いなるアルチュセールの時代（つまり 1966-68 年）の後で起こったことは、私を彼ら全員に―少なくとも実質的に―近付けました。なぜなら彼ら自身、自分たちの言説を複雑化することを余儀なくされたからです。
>
> かつて階級闘争の概念が目指したものに関心を持つこと、社会的諸勢力間の対立の分析に関心を持つことは、依然として絶対的に不可欠である、と思っています。しかしこれまで継承されてきたような階級概念は、かなり差異化されたものにならない限り、そうしたさまざまな活動の最良の道具とは言えないでしょう。当時既にこのことを感じていました。私には「社会階級」という表現を使って、完結した、あるいは説得力のある文章を構築することはできません。実際、社会階級が何を意味しているのか私には分かりません。辞書的な意味のいくつかは知っていますが、それらは（フランス語の表現として)「領野 champ=field」と呼ばれるものに特有な重層的規定を理解するには不十分だと思えるのです。そしてもし、重層的規定という概念と論理を真剣に受け止めるなら（私は、この点についてはそれほどためらいを覚えていません)、この論理は跳ね返ってきて、何等かの形で付着しているもののほとんど全てを脅かし、破綻させることになるかもしれません。重層的規定についてアルチュセールの言っていることは全て、彼の言説のその他の部分よりも私にとって満足のいくものでした。しかし悲しいかな、それは結局、他のほとんど全ての部分を犠牲にする形で、私に満足のいくものとなっているということなのです。とりわけ、「最終審級において」という言説は、彼の企て全体の形而上学的な係留点になっていると思います。(「政治と友情」ジャック・デリダ（インタビュー＝マイケル・スプリンガー）仲正昌樹訳、200-202 頁）

デリダにとって、「重層的決定」という概念は、他のアルチュセールが提起した概念に比べると、比較的満足のいくものであったが、それでも、前提としている「階級闘争」や「社会階級」といった規定があまりにも漠然としたものであるため、その点を捨象することでしかそう認めることができないとしている。

また、市田良彦に拠ると、アルチュセールは 1970～71 年頃、デリダと弁証法をめぐって集中的な討論を行っているようで、デリダに対する次のようなアルチュセールの覚書が残されているという。

++　彼は非常にアンチ弁証法である。彼の試みが危険だとは思わないが、それは、異質なもの、自己ではない他者の、要するに支配-臣従化-統制の反復を明らかにしているだけではないのか。なぜこんな支配賛美があるのかわからないまま。彼の試みは反復を、理解させずに確認することに終わりかねない。弁証法が作動する fonctionner ありようを解明しなければならない（この作動について JD は何も語っていない。あるいはなにか言いにくいところがあるようだ）。しかし、その作動を解読しなければならない。（市田良彦『アルチュセール　ある連結の哲学』平凡社、2010 年９月、81 頁[21]）

アンチ弁証法の旗幟が鮮明なデリダではあるが、アルチュセールにしてみれば、そのようなデリダの態度は、新たな支配の言語を、理解せずに反復しているだけに過ぎないのではないか、という危惧が表明されている。アルチュセールにしてみれば、デリダに対しては、このような言い分があった訳であり、そこには 1970 年のイデオロギー論、『再生産について』で論究されている「イデオロギーと国家とイデオロギー諸装置」による考察の結果が反映しているとみることもできる。後年、アルチュセールはかつての自己の言説をなぞりながら、その結論のみを正に「転倒する」かのような自己批判を行うことになるが、ここでその内容を検討することはできない。その点に関心のある向きは、ここに紹介した市田良彦の著書や、バリバールのアルチュセール論等を参照して頂きたい。

また、昨年（2017 年）は『資本論』の初版が出版されてから 150 年に当たり、「現代思想」が六月臨時増刊号として総特集「マルクスの思想」を刊行しているのだが、そこに柄谷行人の「精神としての資本」が掲載されている。当該論文は Crisis & Critique（http://crisiscritique.org/past.html）に掲載された Capital as Spirit の日本語原文ということだが、その冒頭部分で柄谷も、アルチュセールが問題としたマルクスの『資本論』第２版の後記の観点から『資本論』は、「資本主義の「必然的没落の理解」を、それの生成過程の「肯定的理解」を通して果たそうとする」ものだとして、以下のように書き出している。

---

[21] Dossier 《philosophie, notes, lettre》,1970-1971, Archives d'IMEC, ALT2. A18-04.01.

++　ここにヘーゲル的論理の唯物論的転倒があるとすれば、それは、弁証法的に発展する主体が「精神」から「資本」となっている点にある。いいかえれば、『資本論』では、商品物神から資本物神にいたる弁証法的発展がとらえられている。マルクスはここで、ヘーゲルの観念論的倒錯を批判するかわりに、あえてそれに従うことによって、資本主義経済としての観念的倒錯がいかにして形成されるかを見ようとしたのである。

具体的にいえば、マルクスは、『資本論』で、貨幣や信用というかたちで存する観念的な力をとらえようとした。そして、そのために、史的唯物論が重視する生産ではなく、交換という観点——史的唯物論が軽んじる——から考えようとした。事実、彼は『資本論』で、資本家と賃労働者という生産関係から始めなかった。商品交換、商品と貨幣から考察し、資本制社会における生産関係が貨幣と商品の間の交換関係を通して形成されることを示したのである。

いわゆる史的唯物論では、国家・宗教などの政治的・観念的上部構造は、経済的下部構造によって重層的に決定されるものの、相対的に自立した構造をもつと考えられている。しかし、その見方では、資本主義経済が、物神としての貨幣や信用の力によってあることを示すことができない。だから、マルクスは『資本論』では交換から出発したのだ。そして、同様のことが、資本制以前の社会に関してもいえる。むろん、そこでは、商品交換とは異なる交換様式が支配的である。たとえば、未開社会では互酬交換の様式が根本的である。その意味で、未開社会における観念的上部構造は、経済的下部構造によって直接的に規定されている、といえる[22]。柄谷行人「精神としての資本」(「現代思想」6 月臨時増刊号 2017 vol.45-11 総特集「マルクスの思想　『資本論』150 年」15-16 頁)

アルチュセールは、あくまでも「生産過程」に拘泥した訳だが、『世界史の構造』以降、柄谷が展開している交換様式論は、いうなればアルチュセールのマルクスに対する徴候的読解の変奏として導出されてきたような気がしなくもない。柄谷行人とアルチュセールとが用いる「構造」という概念には、ある種の共約的関係があるように思えるのだ。それを裏打ちしているのは、両者の、精神分析—フロイトとの関係であるが、いかがであろうか。

---

[22] 柄谷行人の自注：私は『世界史の構造』(岩波書店 2010, Duke UP2014) において、社会構成体の歴史を複数の交換様式から見る見方を提起した。それは、マルクスが『資本論』で資本制社会を交換様式 C（商品交換）から見たことを、全歴史に拡張することであった。交換様式は、A（贈与とお返し)、B（服従と保護)、C（商品交換)、さらにそれらを超える D に分けられる。私はこの稿では、特に交換様式 C について焦点を絞って考えなおしたのである。

3.4 理論的実践の《理論》(《théorie》de la pratique théorique)

ルカーチ流のマルクス主義は、革命の主体プロレタリアートの問題を革命の「実践」に解消し、さらにこれを経由して、物象化を克服する「個人的実践」にまで問題をさしもどした。理論の経験をここまで追い込んだ時代の状況のもとでは、全共闘運動以降の大衆ラジカリズムの叛乱は、いわば必然であった。そして理論と実践の経験がここまできたところで、革命の問いは、いずれにしても近代世界の物象化現象そのものの「否定」へと向わざるをえない。

けれども、すでに 1960 年代以降のラジカリズムの経験をあとづけてきたように、近代世界の物象化の徹底性は、これに対応してその「否定」をも、各人の実践において抽象化してしまうのが実情である。人間にとって近代の物象化が一つの抽象であれば、その全的否定もまた裏返しの抽象であるしかないからだ。―「反近代」の抽象性とはこのことである。

長崎浩『革命の問いとマルクス主義』(エスエル出版会、1984 年 1 月、155 頁)

実践は、近代において人間存在の核心に位置する概念となった。近代的人間はすぐれて実践的人間としてとらえられているのである。カント哲学にしろヘーゲル哲学にしろ、実践の概念をぬかしてはなりたたぬ体系なのである。だが実践についてこれまで、そして現在何が語られてきたか、と問いなおすならばわたしたちははたと当惑してしまう。もちろん、実践についてこれまでさまざまな言説が積み重ねられている。だが、そこで語られる実践概念は、個人的な倫理的な行為としての実践であったり、自由な意志の投企としての実践であったり、社会学的に観察される日常的な実践であったり、またともかくも実践を自由な行為として前提したあとの「実践と理論」、「実践と歴史」などなどの問題構成にしたがった実践論であった。近代哲学の地平のなかでは、みずからの自由を証かす行為として実践はあらかじめ価値づけされていたのである。対談中でもふれられているように、「透明な自由意志の主体の行為としての実践」という、実践概念のそもそもの前提にこそ実践論のアポリアはひそんでいたとしなければならない。社会的な行為としての実践をどのように基礎づけるかは、もっとも迂遠なようにみえてしかしもっとも確実な論理構築の出発点であるように思える。

『歴史的実践の構想力』(「Ⅰ　実践論のパラダイム」の小阪修平による序文、作品社、1991 年 11 月、6 頁)

※理論と実践という対句は、ここに示した長崎浩氏と小阪修平氏からの引用文にも示されているように、近代における理論的思考において連綿たる厚みを有しているとともに、それらの思考が辿り着いてしまう一つの隘路を構成しているようにも見える。長崎浩氏や笠井潔氏の場合、革命への問いや、その実践を、次第にマルクスそのものから切り離す方向に向かい、現象学的な記述(長崎浩『政治の現象学あるいはアジテーターの遍歴史』〔田畑書店、1977 年〕、笠井潔『テロルの現象学』〔作品社、1984 年〕)を通して、政治的実践と革命的実践そのものを切り分けて考える方向に向かったように思える。それに対して小阪修平氏は、雑誌「ことがら」(1982～1986 年)で連載した、『制度論－世界の意味と私の意味』(連載は 1984 年の「ことがら」6 号まで)を「実践論」から始めるという構成をとり、近代的思考を拘束してきた「実践という観念の運動」を軸に、〈私〉と〈世界〉といった哲学的二分法の構図を解きほぐし、それらの関係性を抽象的な〈場面〉という力場へと切り開く、新たな存在論を模索していたように思われるが、その試みは、彼の早すぎる死によって成し遂げられることなく頓挫してしまった。小阪氏の場合においても、時代状況からする基本的な問題点は、少なくともかなりの部分、長崎氏や笠井氏とは共有されていた訳だが、両者と比較すると、小阪氏は、より哲学的な地点でその思考を積み重ねていたように思われる。

※その小阪氏が、『オルガン　＃5』で組んだ「旋回する権力」という特集で、山本哲士氏に行ったインタビ

ュー「権力をどう語るか」の中に「実践ではなくプラチックの場を考える」と題されたくだりがある。その山本氏の発言には、アルチュセールの「実践論」を読むに際して、留意しておきたい部分があるので、少し長くなるが、以下に引用しておく。

小阪：あえて意地悪くどんどん聞いていくんですけども、じゃ古典がちゃんと語っていると言った時に、今山本さんが概念とおっしゃったんですが、一体何をとらえていたんだろう。つまり、ちゃんと語った時と権力をちゃんと語らないときの差というのはどこにあるわけですか。

山本：そこはぼくが一番大きく問題にしていますプラクシスとプラチックということばでとりあえず区別していることに関わります。社会的な人間の生活、社会的な活動、それから社会的な行為、これをどうとらえるのかと言った時に、今までのディスクールの質がプラクシス＝実践の面を人間の生活であるというように規定している。

別の言いかたをしますと、大衆なり民衆なりが意識的・意図的なかたちで登場してくる実践を社会生活の存在のベースに置いて、それを対象にしていったというわけです。その発想からくる思考が権力論の深い理解を見誤る方向に導いたという理解です。だから労働者なら労働者を見る場合、労働者の生産、しかも資本主義的な諸関係に組み込まれてくる、もっと具体的にいうと労働運動的な社会実践、社会的プラクシスのみを議論していて、そこで労働者が日々御飯を食べたり、歌を歌ったり、テレビを見たりとか、そういう状況のプラチックを考察の対象に入れてない。入れてないどころか、レジャーとしてくくったり、逆にそこに家事まで介在させて、それが資本主義に巻き込まれているとか、プチブル的な生活をしているとか、あるいは意識が足らないとかいうかたちで、道徳的に裁いていく。

そういう前提に、みんなのっかっていたといえます。ですからプラチックという「慣習の心性・行為」を見ようとしていないところから一番大きな問題がきていると思います。そのプラチックという問題は、ぼくは何度も書いていますけれども、マルクスというのは理論と実践の一致を言ったんではなくて、理論と実践の一致を言ったのはフォイエルバッハたち観念論者・神秘主義者たちが言った。理論と実践の一致というものを見るような思考は、「社会的プラチック」を見ていないというところをマルクスは問題にしている。社会実践を考えないのではなく、「社会的プラチック」、社会生活の実際行為を考えていないではないか、とマルクスは批判しているんですね。

ところが、理論と実践の一致がマルクスの根本思想なんだというふうにマルクス主義論者はとくに「政治」の領域では理解してきた。そういった社会的プラチックの状態というのは、抑圧された無目的状態だというのは、道徳的なモラルなんで、道徳的価値裁定がそこに入ってしまう。対象の存在それ自体を見ていかないような状況ですね。マルクスは「実践」というあり方をとらえる対象への手続きの仕方を批判しているんです。一方、存在の対象それ自体を見ようとする人たちは、対象の存在それ自体つまり、大衆とか民衆を価値づけちゃって、存在がどのような構成と編成になっているのかをとらえないで、生活大衆主義に落ち込んでいってしまう。

（中略）

ですから、国家が政治革命の社会主義的実践のテーマとしてたてられてしまい、社会的プラチックの問題領域としてたてられない。ルイ・アルチュセールは、国家の暴力装置と「イデオロギー装置」を区別して、人びとの日々のプラチックに表象するイデオロギー支配のあり方を抽出しましたが、アルチュセールは「社会制度」と「国家のイデオロギー装置」とを同列的に扱うため、プラチックを構造化して議論してしまうんですが、〈場〉は切り拓いています。つまり、プラチックをイデオロギーではなく「権力」の領域へくみこんでいくことが大事なんですが、これをアルチュセール派はなしえていないですね。

するとどこにもここにも価値があるというかたちで言う権力観が、マルクス主義的な権力論として残されたままになるんですよ。だから、権力をなくそうとかなくさないとかいう問題じゃなくて、そういった諸関係のあり方を理解しながらどのようなかたちで関係性の均衡・調和というか、関係性のある種のハーモニィーと言ったらいいか、そういったものをぼくは探っているというふうに自分を理解するんですね。権力も調整してきますし、個々人も

主体的に服従してきますね。
小阪：すると古典的な権力に対する言説は、昔風の言葉でいうと「日常性」の外に実践を見ようとしたと。あくまでも昔風の言葉ですが。これはぼくの世代的な体験として、実は権力というのは日常性の中から構成されている、あるいは下から構成されているというのが、わりと大きな体験だったという気がするんです。プラチックというのは、そういう概念であると。実はマルクスに関しても『経哲』にいたるまでの時期は、標的はバウアーの批判的自己意識の理論だと思うんですけれども、あれこそ山本さんの批判するプラクシス、抽象的なプラクシスの議論だと思います。
山本：実際自分でやっていて分かるはずなんだよね。実際に街頭闘争をやったり、人をつるし上げ、暴力を行使したり、あれはどうみても現実的な社会的行為だと思えないんですよ。非常に抽象的なのは自分でやってみてよくわかった。それを片一方では絶対にやらなければならぬ局面はありますが、こちらのプラチックの諸関係のダイナミズムとの調和関係がとれない。断ち切るものですね。

「小阪修平による山本哲士インタビュー、権力をどう語るか—実践ではなくプラチックの場を考える」
『オルガン#5』（1988 年 8 月、141-142 頁）

アルチュセールの「唯物弁証法について」では、「矛盾と重層的決定」で表明されたマルクスの弁証法の種差性に関する、さらなる理論的追及が行われている。「理論的問題である、と言うのは、その理論的解決が、マルクス主義理論の他の認識と有機的に結合された新しい認識をわれわれにあたえるはずだ、という意味である。理論的問題である、と言うのは、それは想像上の単なる困難をさすのではなくて、問題という形式で、すなわち、問題が提起（設定）される認識（理論的な）の領域、問題提起の正確な場、問題提起に必要な諸概念などの決定づけという、絶対必要な条件に合致した形式で提起された、現実に存在する困難をさしている」（「唯物弁証法について」『マルクスのために』、286 頁）とアルチュセールは記している。

アルチュセールは、ここに理論的実践、すなわち理論という形式で存在する実践[23]の問題

[23] 西欧語では、"practice"（英語）、"Praxis"（ドイツ語）、"pratique"（フランス語）などとされる実践概念は、そもそもの出自はギリシア語で「活動」を意味するプラクシス（πρᾶξις）にたどり着く。プラトンやアリストテレスなど、古代ギリシア哲学では、プラクシスをテオリア（観想）に対立させて理解した。すなわち、テオリアはロゴスによって永遠なる神やイデアを観想するものであり、プラクシスは流動的・一時的な感覚世界に属する人間の行為全般を捉えるものである。さらに、アリストテレスは、自然環境を対象とするポイエーシス（実用的な制作）との対比から、プラクシスを、人間社会を対象とする公共性を有した精神的な倫理的・政治的実践として捉えてもいる。
近代に入ると、自然科学の方法を人間社会に適用しようとする動きがみられ、これに対して、カントは、あくまで実践（プラクシス）の中心を道徳的な実践理性に従う倫理的実践に求めた。つまり、実践理性を、感性的・経験的動機に規定される理論理性による実践と区別し、科学や技術の進歩によっては支配されない主体の自由を強調したのである（実践理性の優位）。そして、こうした自由な道徳的実践が人間性の完成として結実する「理性の王国」が、人間の歴史的実践の目的とされた。
このようなカントの理論理性と実践理性の二分法に対して、マルクスは、一般に、歴史を「理性の自己運動と実践的な自己実現の弁証法」の過程として捉えるヘーゲル哲学を徹底させたとみられている。そして、物質的世界に対する労働実践をあらゆる認識と運動の根拠として、「労働の解放」と「労働からの解放」を主張するに至った。マルクス主義における革命的実践においては、実践によって理論が生み出され、理論

を見出している。もう少しアルチュセールの言い方をみてみよう。

> さて、まさにこの場合、理論的問題と解決という形式で表明されている事柄は、すでにマルクス主義の実践のなかに存在している。（中略）したがってけっきょく、われわれの理論的問題の提起と解決は、実践の状態で存在する「解決」、すなわち、マルクス主義の実践が、その展開においてであった現実上の困難にあたえた「解決」を理論的に表明することにある。マルクス主義の実践はその現実上の困難の所在を指摘し、またマルクス自身の認めるようにその困難を清算したのである。（Ibid、287 頁）

アルチュセールは、この理論と実践とのあいだの「隔たり」を「正確な地点で埋めることだけが肝要」であり、問題の解決は既にマルクス主義の実践の中に存在するのであるから、その実践の中から理論を取り出して、「問題解決を理論的に表明することだけが肝要」であるといいながら、その直後に、それでは不十分であり、「実践的解決の種差的な概念、つまり認識をみがきあげるだけでなく、さまざまな混乱、すなわち存在しうるイデオロギー上の幻想やその近似物などを、根本的な批判によって、現実に破壊するような、現実上の理論的な労働を要求している。」（Ibid、288 頁）と記し、次の質問を提示してみせる。すなわち、「実践にとって本質的であるような理論とは、どういう意味であるか？」（Ibid、289 頁）。

少々煩瑣になるが、アルチュセールの記述を、順を追って読み解いてみよう。

〈アルチュセールによる第一の実践の定義〉

> 所定の原材料の所定の生産物への転化の全過程、すなわち、所定の手段（「生産」の）をもちいる、所定の人間労働によっておこなわれる転化の全過程。このように理解されたどんな実践においても、この過程の決定的な契機（あるいは要素）は、原材料でも生産物でもなく、狭い意味での実践である。すなわち、人間、手段、手段活用の技術的方法が種差的な構造においてもちいられる、転化のための労働それ自体であるという契機である。実践のこの一般的な定義は、それ自身のうちに個別的なものの可能性をふくんでいる。つまり、複合的な同じ一つの全体性に有機的に属しながらも、現実に区別される多種多様な実践が存在している。「社会的実践」は所定の社会に存在するさまざまの実践の複合的統一体であるが、区別されうる多数の実践をふくんでいる。（Ibid、289-290 頁）

アルチュセールは、このように「社会的実践」の複合的な統一体は、様々な実践形式をふくんでいるが、そこで「最終的に決定的な実践は、実在する人間の活動による、所定の自然

によって実践が調整され組織化されるという「理論と実践の統一」があらわれるとされている。（以上、Wikipedia の「実践」の項から抜粋編集）

（原材料）の有用な生産物への転化」（Ibid、290 頁）であるとしている。また、アルチュセールは、「社会的実践」には、このような生産における実践のほかに、政治的実践、イデオロギー的実践、理論的実践を本質的次元として捉えるべきだとしている。

〈アルチュセールによる第二の実践の定義〉

われわれは、この点で、理論の意味を、実践の種差的な形式であり、やはりそれも、ある所定の人間社会における「社会的実践」の複合的な統一体に属するもの、というふうに考えることにしよう。理論的実践は、実践の一般的定義にふくまれる。それは、他の実践、「経験的」であれ、「技術的」であれ、「イデオロギー的」であれ、そういう実践によってあたえられる原材料（表象、概念、事実）に働きかける。（Ibid、291 頁）

つまりアルチュセールは、全ての「理論」は「実践」の種差的な形式であり、マルクス主義において生産を本質的な契機とする「社会的実践」に予め埋め込まれている形式であるとみなしているものとして、「理論」を次のようにも規定している。

〈アルチュセールによる理論の定義〉

理論とは、科学的性格をもついっさいの理論的実践である。「理論」（括弧つきの）とは、現実に存在しているある科学の所定の理論体系（所与の辞典において多少とも矛盾している統一体における、その基本的な諸概念）であり、たとえば、万有引力の理論、波動力学など・・・あるいはまた史的唯物論の「理論」をさす。「理論」の面では、所定のどんな科学も、その科学の諸概念の複合的な統一体（しかも多少とも問題をふくむ統一体）のうちに、その科学固有の理論的実践の諸結果、条件や手段となる諸結果をも写しだす。《理論》（この二重ギュメつきの）とは、一般的な理論である。つまり、実在する理論的実践（諸科学についての）にかんする《理論》を出発点として磨きあげられた実践の一般《理論》、実在する「経験的」実践（人間の具体的活動）にもとづくイデオロギー的な生産物を、「認識」（科学的な真理）へ転化する実践の一般《理論》をさす。この《理論》は、弁証法的唯物論と一体をなしている唯物弁証法である。（Ibid、292 頁）

これらの「実践」及び「理論」の定義を踏まえながら、アルチュセールは、マルクス主義が成し遂げるべき理論的革命の出発点を、マルクス主義の理論的実践（A）とマルクス主義の政治的実践（B）に置いている。

〈A　マルクス主義の理論的実践〉

理論とは、ある固有の対象に働きかけ、その結果、固有の生産物、すなわち、認識を生みだすような、種差的な実践である。どんな理論的な仕事も、それ自体を考えると、一定の原材料および「生産手段」（「理論」の諸概念と、それら諸概念の使用法である方法）を前

提としている。理論的な仕事によって扱われる原材料は、誕生しつつある科学においては、きわめて「イデオロギー的」でありうるし、すでに構成され、すでに発展している科学においては、すでに理論的に練り上げられた原料、すでに形作られた科学的な概念でありうる。ごく図式的に述べると、理論的な仕事の手段は、「理論」と方法という、この仕事の条件そのものであり、これは理論的実践の「積極面」、この過程の決定的な契機をあらわしている。この理論的実践の過程を、その一般性において認識すること、つまり、一般的転化ならびに「事物の生成」の種差化された形態である実践の、種差化された形態もしくは現実的差異として認識することは、《理論》、すなわち唯物弁証法の最初の理論的な練り上げをなすものである。（Ibid、300 頁）

ここで《理論》と呼ばれているものは、端的にマルクスの「弁証法」である。アルチュセールは、『資本論』等のマルクスの理論的著作のうちに、その「弁証法」が実践状態で稼働していることを見出しており、そのマルクスの「弁証法」理論は、理論の状態で書き表されることはなかったとみなしている。故に、われわれはマルクスの「標識」に導かれて、その《理論》に向かわなければならないというのである。

〈B　マルクス主義の政治的実践〉

同様のことが、階級闘争をめぐるマルクス主義の政治的実践の場合にも言える。わたしは最近の試論では、一九一七年のロシア革命の例をあげた。ただし、それと異なった、現代的な例を数多くあげることもできたにちがいないという点は誰もが気づくし、そのことは心得ている。このロシア革命の場合、マルクスに由来する例の「弁証法」と、その弁証法においてヘーゲルからマルクスを区別する例の「転倒」が――やはりまた実践状態で――働き、それと同じことだが、試されている。（中略）政治的実践は、他のあらゆる実践と同じく、その《理論》なしに、存在し、生きながらえ、しかも発展さえすることができるけれども、そうできるのは、政治的実践が、その対象（政治的実践が転化させる社会という実在する世界）が充分な抵抗をしめす結果、やむをえず、その隔たり〔実践と対象との〕をうずめ、みずからの方法に疑いをもち、考えなおさざるをえなくなくなる時までである。そうせざるをえないのは、政治的実践が適切な解決とそれを生みだす方法とを生みだすためであり、とくに、政治的実践の基礎たる「理論」（実在する社会構成体にかんする理論）のうちに、社会構成体の発展にみられる新しい「段階」の内容に対応した新しい認識を生みだすためにほかならない。（Ibid、304-305 頁）

つまり、マルクス主義の政治的実践も、それはレーニン等のうちに実践状態で稼働してはいるが、政治的実践の《理論》が定着された著作を見出すことはできないというのである。アルチュセールは、この点について、レーニンの『何をなすべきか？』を例に挙げて、そこでも政治的実践そのものについての理論的考察が行われていない点を指摘している。

アルチュセールは、このような地点から、マルクスの『経済学批判序説』に理論的実践の理論を、そして、レーニンの『哲学ノート』及び毛沢東の『矛盾論』の中に政治的実践の理論を読み解こうとしている。

アルチュセールは、毛沢東の『矛盾論』における「普遍性」における矛盾の考察から「矛盾はつねに種差的であって、その種差性は普遍的に矛盾の本質に属する。」（Ibid、316 頁）という「普遍的なものに関する予備的な仕事」に関するテーゼを導いているが、それは弁証法的唯物論にとって本質的なものであり、マルクスが『経済学批判序説』で例証を挙げる際に、その論点をあつかっているという。

> 一般的な諸概念（たとえば、「生産」、「労働」、「交換」など）が科学的な理論的実践に不可欠である場合に、この最初の一般性は科学的な仕事の産物と一致しないこと、それは科学的な仕事の結果ではなく、その予備的なものであることを証明するときだった。この最初の一般性（それを《第一の一般性》と呼ぶことにする）が、原材料を形づくり、科学の理論的実践によってこの原材料は種差化された「概念」つまり、認識という、もう一つ別の「具体的な」一般性（それを《第三の一般性》と呼ぶことにする）へと変えられる。ところでその場合、《第一の一般性》、つまり、科学の仕事が働きかける理論上の原材料とはなにであろうか？　経験論や感覚論におけるイデオロギー的幻想（「素朴な」、単なる「間違い」というのではなくて、イデオロギーとして必然的で基礎づけられた幻想）とは反対に、科学はけっして、実在しているもの――純粋な直接性と単一性（「感覚」や「個人」）を本質とするところの――に働きかけない。科学はつねに「一般的なもの」に――それが「事実」の形式をおびているときでも――働きかける。（Ibid、317-318 頁）

> だが、なにが作用するのか？　科学は作用する、という表現はなにを意味しているのか？すでに見てきたように、一般にどんな転化（どんな実践）も、一定の生産手段の働きによる、原材料の、生産物への転化を予想している。科学の理論的実践の場合、その生産手段に対応するところの、契機、水準、審級とはなにであろうか？　それは、これらの生産手段のなかで、仮に人間を考慮にいれない場合、われわれが《第二の一般性》と呼ぶところのものである。それは一群の概念によって構成されているが、その概念の、多少とも矛盾する統一体が、一定の時期（歴史的な）における科学の「理論」を構成する。つまり、科学のあらゆる「問題」が必然的に提起されるところの領域を決定する理論を構成する。（Ibid、319 頁）

こうしてアルチュセールは、マルクスの『経済学批判序説』の「経済学の方法」[24]に関する記述から、「理論的実践は、《第一の一般性》にたいする《第二の一般性》の仕事によって、

[24] マルクス『経済学批判序説』（岩波文庫『経済学批判』付録 1、「三　経済学の方法」311-325 頁）

《第三の一般性》を生みだす。」という標識を立てる。「科学」という作用の中で、《第一の一般性》＝原材料、《第二の一般性》＝理論、《第三の一般性》＝認識というかたちで「一般性」の区分が設けられたわけである。アルチュセールは、この点から次に示す重大な二つの命題を理解することができるとしている。

〈第一の命題〉

《第一の一般性》と《第三の一般性》のあいだには、けっして本質的な同一性はない。イデオロギー的な一般性の、科学的な一般性への転化（たとえば、バシュラールが「認識論上の切断」と呼んでいる形式において考察される変容）によってであれ、科学的な古い一般性を「包含し」ながらも、それを非難するところの、つまり、その「相対性」と有効さの限界（従属的な）とを決定するところの、新しい科学的な一般性の生産によってであれ、つねに現実的な転化が存在している。（Ibid、320 頁）

〈第二の命題〉

《第一の一般性》から《第三の一般性》へ、換言すると、この両者を区別する本質的な差異を考察にいれなければ、「抽象的なもの」から「具体的なもの」へ移行させる仕事は、理論的実践の過程のみに関係している。換言すると、それは完全に「認識のなかで」おこなわれる。（Ibid、320 頁）

マルクスの『経済学批判序説』の記述から、この一般性の区分を見出したアルチュセールは、「抽象的なものとか具体的なものなど、この同じ言葉が関連をもっているところの、イデオロギー的な幻想」つまり、「抽象的なものが理論それ自体（科学）を指示する一方、具体的なものが現実的なもの、「具体的」現実――理論的実践によってその認識が生まれる――を指示する、というふうに考えないこと」（Ibid、320-321 頁）が肝要であるとしている。

そしてこのような一般性の区分から、マルクスにおける科学的実践、すなわち弁証法の方法論について、ひとまず、以下の結論が述べられている。

科学的実践が抽象的なものから出発して、認識（具体的な）を生みだす、といつことを認めること、それはまた理論的実践の原材料たる《第一の一般性》が、《第二の一般性》――《第一の一般性》を「思考における具体的なもの」、つまり認識（《第三の一般性》）へ転化するところの――とは質的に異なるということを認めることである。これら二つのタイプの《一般性》を区別する差異を否定することや、《第一の一般性》（働きかけられるところの）にたいする、《第二の一般性》（働きかけるところの）、つまり「理論」の優越性を認めないこと――それこそはヘーゲルの観念論の基礎そのものであって、これはマルクスによって拒否されているものである。（Ibid、329-330 頁）

〔参考資料①〕アルチュセールのジャック・マルタンへの追悼文

生きる理由がなくなると知ったとき、彼はもう終わりにしようと決めた。彼の知性、その知性の最後の変遷が、結局のところ、あらゆる希望を永遠に打ち消し、この明晰な行為へと辿りついた。夜の闇が迫りくるまえに彼は旅立ったのだ。

誰かわかってくれる人が彼にはいたのだろうか。なにか頼みの綱があったのだろうか。少なくともわれわれは、こうした考えに胸を引き裂かれたままでしか、彼の死後も生きつづけることはできない。だがそれにしてもどんな頼みの綱が可能だったというのだ。自分の不幸をわきまえていただけに、最後の瞬間に死ぬかどうかを決めるのは自分自身だと彼にはわかっていた。

二十年間にわたって、彼は冷徹に、落ちついて、曖昧なところのない、明確な態度で闘いつづけ、決して衰えを見せたり、妥協したりすることがなく、ひと言たりと泣き言を洩らしもしなかった。まさに威厳のある態度だった。際限のない苦悩の夜のなかで死者のごとく生きながらえるよりも、彼はみずから死ぬ道を選んだ。

彼以前にも、学問において、あるいは行動において、明晰な選択として限界まで行きつめる危険を冒したすえに、自由を求めて死んでいった者たちがいる。彼の場合は限界を選びとることはできなかった。それは人生の牢獄のなかに永遠に閉じ込められてしまっていたからだが、そうした恐ろしい束縛状態を彼は信じられないような知的体験に変えてしまった。それだけが彼の唯一の自由だったのだ。

いまになってようやくわれわれにも見えはじめているものを彼は二十年前にすでに体験してしまっていた。いまから二十年後も、われわれはまだ彼から学びつづけていることだろう。

十六年前に書かれた二篇の文章、そして人生の幕が下ろされるまでのその行動や発言をとおして彼が残した思想は、彼の死をもたらす諸刃の刃だったのである。

ルイ・アルチュセール

ヤン・ムーリエ・ブータン『アルチュセール伝』（筑摩書房、592-593 頁より採録）

〔参考資料②〕マルクス『フォイエルバッハにかんするテーゼ』

1　フォイエルバッハについて

一

これまでのあらゆる唯物論（フォイエルバッハのをもふくめて）の主要欠陥は対象、現実、感性がただ客体の、または観照の形式のもとでのみとらえられて、感性的人間的な活動、実践として、主体的にとらえられないことである。それゆえ能動的側面は、唯物論に対立して抽象的に観念論――これはもちろん現実的な感性的な活動をそのようなものとしては知らない――によって展開されることになった。フォイエルバッハは感性的な――思惟客体とは現実的に区別された――客体を欲するが、しかし彼は人間的活動そのものを対象的活動としてとらえない。それゆえ彼は『キリスト教の本質』においてただ観想的態度のみを真に人間的な態度とみなし、それにたいして、他方、実践はただそのさもしくユダヤ人的な現象形態においてのみとらえられ固定される。それゆえ彼は「革命的な」活動、「実践的に批判的な」活動の意義を理解しない。

二

人間的思惟に対象的真理がとどくかどうかの問題はなんら観想（テオリー）の問題などではなくて、一つの実践的な問題である。実践において人間は彼の思惟の真理性、すなわち現実性と力、此岸性を証明しなければならない。思惟――実践から切り離された思惟――が、現実的か非現実的かの争いは一つの純スコラ的な問題である。

三

環境と教育の変化にかんする唯物論的教説は、環境が人間によって変えられ、そして教育者自身が教育されねばならぬことを忘れている。それゆえこの教説は社会を二つの部分――そのうち一方の部分は社会を超えたところにある――に分けざるをえない。

環境の変更と人間的活動または自己変革との一致はただ革命的実践としてのみとらえられうるし、合理的に理解されうる。

四

フォイエルバッハは宗教的自己疎外、すなわち宗教的世界と世俗的世界への世界の二重化、の事実から出発する。彼の仕事は宗教的世界をそれの世俗的基礎へ解消するところにある。しかし世俗的基礎がそれ自身から離脱して、雲のなかに一つの自立的な王国を自身のためにしつらえるということは、ただこの世俗的基礎の自己滅裂状態と自己矛盾からのみ明らかにされるべきである。それゆえにこの世俗的基礎そのものがそれ自体において矛盾したものとして理解されるとともにまたそれ自体において実践的に変革されねばならない。したがってたとえば地上の家族が聖なる家族の秘密としてあばかれた以上は、こんどは前者そのものが理論的かつ実践的になくされねばならない。

五

フォイエルバッハは抽象的思惟にあきたらず、直観を欲する。しかし、彼は感性を実践的な、人間的感性的な活動としてとらえない。

六

フォイエルバッハは宗教性（ヴェーゼン）を人間性（ヴェーゼン）に解消する。しかし人間性は一個の個人に内在する抽象物ではおよそない。その現実性においてはそれは社会的諸関係の総体（アンサンブル）である。

この現実的なあり方（ヴェーゼン）の批判へ乗り出すことをしないフォイエルバッハはそれゆえにいやおうなしに、

⑴ 歴史的経過を切り捨て、宗教的心情をそれだけとして固定して、一つの抽象物——孤立的——人間としての個体を前提せざるを得ない

⑵ 本質（ヴェーゼン）はそれゆえただ「類」としてのみ、内なる、無言の、多数個人を自然的に結び合わせる普遍性としてのみとらえられうる。

七

それゆえフォイエルバッハは、「宗教的心情」そのものが一つの社会的産物であること、そして彼が分析する抽象的個人が或る特定の社会形態に属することを見ない。

八

あらゆる社会的生活は本質的に実践的である。観想を神秘主義へ誘うあらゆる神秘はそれの合理的解決を人間的実践のうちとこの実践の把握のうちに見いだす。

九

観照的唯物論、すなわち感性を実践的活動として把握することをしない唯物論が到達するところはせいぜい個々の個人と市民社会との観照である。

一〇

古い唯物論の立場は市民社会であり、新しい唯物論の立場は人間的な社会もしくは社会的人類である。

一一

哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝腎なのはそれを変えることである。

1845 年春に執筆

マルクス・エンゲルス・レーニン研究所、モスクワ 1932 年の刊本による

（大月書店『マルクス・エンゲルス全集　3』1963 年 4 月、3-5 頁）より採録

〔参考資料③〕エンゲルス『資本論　第二部　序言』（抜粋）

では、マルクスは剰余価値説について、どんな新しいことを語ったか？　ロートベルツスを含むすべての社会主義的先駆者の学説が影響もなく消滅したのに、マルクスの剰余価値学説が――しかもすべての文明国で――青天の霹靂のように轟いたのはどうしてか？

化学の歴史は、このことをわれわれに例証することができる。

まだ前世紀末には、周知のように燃素説が支配的であったが、この説によれば、すべての燃焼の本質は燃焼物体から他の仮説的物体――燃素という名称で呼ばれた絶対的可燃物――が分離することにあった。この学説は、ときにこじつけがないでもなかったが、当時知られていた大抵の化学的現象を説明するに足りた。ところが 1774 年にプリーストリが一種の気体を製出したのであって、「彼はそれが、普通の空気もそれに較べればすでに不純に見えたほどにも純粋な――すなわち燃素を含まない――ことを見出した」。彼はそれを脱燃素気体と名づけた。その後まもなく、スウェーデンのシェーレが同じ気体を製出し、それが大気中に現存することを証明した。彼はまた、その気体が、その中または普通の空気中で物体を燃焼させれば消滅することを見いだし、そこでそれを火気体と名づけた。「さて、これらの結果から、彼は、燃素が空気の成分の一つと結合するさいに」（すなわち燃焼するさいに）「生ずる化合物は火または熱に他ならず、これはガラスを通して漏れるという結論を下した[25]。」

プリーストリならびにシェーレが製出したのは酸素であったが、彼らは、何を手にしたのか知らなかった。彼らは「彼らが見いだすままの」燃素説的「諸範疇にとらわれていた」。燃素観念ぜんたいを顛覆して化学を革命するはずの元素も、彼らの手ではついに実を結ばなかった。だが、プリーストリは間もなく彼の発見をパリでラヴォアジェに知らせたのであって、ラヴォアジェはそこでこの新事実を手がかりに燃素化学ぜんたいを研究して、かの新気体は化学的新元素であることを、燃焼においては不可思議な燃素が燃焼物体から出てゆくのでなく、この新元素が燃焼物体と化合することを、はじめて発見し、かくして、燃素説形態で逆立ちしていた全化学をはじめて脚で立たせた。だからラヴォアジェは、彼が後に主張するように前二者と同時にかつ彼らから独立して酸素を製出したのではないとしても、それでもなお、かの両者にたいしては酸素の真の発見者なのであって、かの両者は、じぶんが何を製出したかを気づきもしないでそれを製出したにとどまる。

剰余価値学説においてマルクスがその先行者にたいする関係は、ラヴォアジェがプリー

---

[25] ロスコ＝ショルレンマー『詳説化学教科書』、ブラウンシュヴァイク、1877 年、第一巻、13、18 頁

ストリおよびシェーレにたいする関係と同じである。われわれがいま剰余価値と名づける生産物価値部分の実存は、マルクスよりも久しく以前から確認されていた。また、それが何から成りたつかということ、すなわち取得者が何らの等価も支払わないで得た労働の生産物から成りたつということも、明瞭さの差こそあれ同じように説かれていた・だが、それ以上には出なかった。一方の人々——古典派ブルジョワ経済学者——は、たかだか、労働生産物が労働者と生産手段所有者とのあいだで分配される量的関係を研究しただけである。他方の人々——社会主義者——はこの分配が不正なことを見いだし、その不正を排除するためのユートピア的手段を探しもとめた。両者ともに、彼らが見いだすままの経済学的諸範疇にとらわれていたのである。

そこへ、マルクスがあらわれた。しかも、彼の先行者のすべてにたいする直接的対立において。彼らがすでに解答を見たところに、マルクスは問題だけを見た。彼は、ここにあるのは燃素的気体でも火気体でもなくて、酸素であることを、——ここで問題なのは、一つの経済的事実の単なる確認でもなく、この事実と永遠的正義および真正道徳との衝突でもなくて、全経済学を変革する使命をもつ一つの事実、用法を心得たひとの手に全資本制的生産の理解のための鍵を提供する一つの事実であることを、見たのである。この事実を手がかりに、彼は、——あたかもラヴォアジェが酸素を手がかりに燃素説化学の既存の諸範疇を吟味したのと同じように、——既存の範疇のいっさいを吟味した。剰余価値が何であるかを知るためには、彼は、価値が何であるかを知らねばならなかった。リカードの価値説そのものがまず第一に批判されねばならなかった。かくしてマルクスは、労働を研究してその価値形成的な質に達し、そして初めて、いかなる労働が・また何ゆえに・またいかにして価値を形成するかということ、および、価値とは総じてこの種の凝固した労働いがいの何ものでもないということを、つきとめた、——これはロートベルツスが最後まで把握しなかった点である。次いでマルクスは、商品と貨幣との関係を研究して、いかにしてまた何ゆえに、商品に内在する価値属性により、商品したがって商品交換が商品と貨幣との対立を生み出さざるをえないかを論証した。この論証を基礎とする彼の貨幣理論は、最初の十全な、そして今や暗黙のうちに一般的に承認されている貨幣理論である。彼は、貨幣の資本への転化が労働力の売買にもとづくことを証明した。彼はここで、労働力——価値創造的属性——を労働の代わりにもってくることによって、リカード学派が崩壊した原因たる諸困難の一つ、すなわち、資本と労働との相互的交換を労働による価値規定にかんするリカードの法則と調和させることの不可能性を、一挙に解決した。彼は不変資本と可変資本への資本の区別づけを確認することによって、はじめて、剰余価値形成の過程をその現実的経過において極めて詳細に叙述し、かくして解明するにいたった、——これは彼の先行者の誰もなしとげなかったところで

ある。かくして彼は、資本そのものの内部における一つの区別を確認したのであって、この区別は、ロートベルツスもブルジョワ経済学者たちと同様にちっとも手をつけることができなかったものであるが、しかしそれは、最も厄介な経済学的諸問題の解決のための鍵を提供するものであって、そのことについては、ここで再び第二部が――そして、やがてわかるように、さらにいっそう第三部が――最も決定的な証拠を提供する。彼は剰余価値そのもの研究を進めて、それの二つの形態――絶対的剰余価値と相対的剰余価値――を発券し、そして、それらが資本制的生産の歴史的発展において演じた相異なる・しかしいずれも決定的な・役割を論証した。剰余価値を基礎として、彼は、われわれのもつ最初の合理的な労賃理論を展開し、また初めて、資本制的蓄積の歴史の概要と、こうした蓄積の歴史的傾向の叙述とを与えた。

（ドイツ語原版 15-17 頁の部分）

マルクス『資本論　2』第 2 部全　エンゲルス編　長谷部文雄訳
（河出書房「世界の大思想 19、昭和 39 年 11 月、17-19 頁」より採録

〔参考資料④〕ヘーゲル『小論理学』より～論理学のより立ち入った概念と区分（弁証法に関する部分の抜粋）

七九

論理的なものは形式上三つの側面を持っている。（イ）抽象的側面あるいは悟性的側面、（ロ）弁証法的側面あるいは否定的理性の側面、（ハ）思弁的側面あるいは肯定的理性の側面がそれである。

これら三つの側面は、論理学の三つの部分をなすのではない。それらはあらゆる論理的存在の、すなわち、あらゆる概念あるいは真理のモメントである。われわれはそれらをすべて、第一のモメントである悟性的なもののもとにおき、かくしてそれらを別々に分離しておくこともできる。しかもその場合、それらは真の姿において考察されないのである。――ここで論理的なものの規定について述べられていること、および論理学の区分は、この序論全体がそうであるように、先廻り的、記述的であるにすぎない。

（中略）

八一

（ロ）弁証法的モメントは、右に述べたような有限な諸規定の自己揚棄であり、反対の諸規定への移行である

⑴ 弁証法的なものが、悟性によってそれだけ切りはなされ、そして特に学問として述べられる場合、それは懐疑論となる。懐疑論は弁証法の成果として単なる否定を含んでいるものである。

⑵ 弁証法は普通、明確な概念のうちに、恣意によって、混乱と外見上の矛盾をひきおこす外面的な技術と考えられており、したがって空しいのはこれらの規定ではなくこの外観であり、これに反して悟性的なものこそ真実なものであると考えられている。実際また弁証法が、ああも考えられこうも考えられるというような、理由をこととする思惟（Räsonnement）の主観的な動揺にすぎないことも多い。こうした理屈は全く内容を欠いていて、ただこうした理屈を作りだす一種の炯眼によってその弱点がおおいかくされているにすぎない。――その真の姿においては、弁証法はむしろあらゆる悟

性的規定、事物および有限なもの自身の本性である。反省（Reflexion）もさしあたり孤立的な規定の超出であり関係づけであって、孤立した規定はそれによって関係のうちに定立されはする。しかしその他の点では、孤立的な規定はやはりそのままで妥当するものとされている。弁証法はこれに反して内在的な超出であって、そのうちで有限で一面的な悟性的規定はその真の姿において、すなわちその否定として示されるのである。すべて有限なものは自分自身を揚棄するものである。したがって弁証法的なものは学的進展を内から動かす魂であり、それによってのみ内在的な連関と必然性とが学問の内容にはいり、またそのうちにのみ有限なものからの外面的でない真の超出が含まれている原理である。

ヘーゲル『小論理学』上巻　松村一人訳（岩波文庫、昭和 26 年、239-245 頁）から採録

〔参考資料⑤〕マルクス『資本論　第二版の後書き』（抜粋）

私の弁証法的方法は、根本的にヘーゲルのそれと相違するばかりでなく、その正反対のものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名称をつけて自立的主体に転化さえした思考過程が、その外的現象たるにすぎぬ現実的なものの創造者である。私にあっては、反対に、観念的なものは、人間の頭のなかで転変され翻訳された物質的なものに他ならない。

ヘーゲルの弁証法の神秘化的な側面は、私がほぼ30年前にそれが流行していた時代に批判した。ところが、ちょうど私が『資本論』の第一巻を仕上げていたとき、教養あるドイツで今をときめく腹だたしい僭越で凡庸な亜流主義は、あたかもけなげなモーゼス・メンデルスゾーンがレッシング時代にスピノザを取扱ったように、すなわち「死せる犬」としてヘーゲルを取扱って得意であった。だから私は、私がかの偉大な思想家の弟子であることを公言して、価値理論にかんする章のそこかしこで、彼独自の表現様式に媚を呈しさえした。弁証法がヘーゲルの手でこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸形態を初めて包括的かつ意識的な仕方で叙述したということを、けっして妨げない。弁証法は、彼にあっては逆立ちしている。ひとは合理的核心を神秘的外被のうちに発見するために、それ〔ヘーゲルの弁証法〕をひっくり返さなければならない。

その神秘化された形態では、弁証法がドイツの流行となった。というのは、こうした弁証法は、現存するものを神々しくするように見えたからである。その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョア階級およびその理論的代弁者たちにとっては、一つの痛憤事であり、一つの恐怖物である。というわけは、こうした弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、それの否定の・それの必然的な崩壊の・理解をも含み、どの生成せる形態をも運動の流れにおいて・したがってまたそれの無常的側面から・理解し、何ものによっても畏伏させられず、その本質上、批判的かつ革命的だからである。

資本主義社会の矛盾にみちた運動は、実践的なブルジョアにとっては、近代的産業が通過する周期的循環の浮沈において最も痛切に感ぜられるのであって、この浮沈の頂点は一般的恐慌である。この一般的恐慌は、まだ前段階にあるとはいえ再び進行中であって、その舞台の全面性ならびにその作用の強さにより、神聖プロシア・ドイツ新帝国の成金たちにさえ弁証法をたたきこむであろう。

1873年1月24日　　ロンドンにて　　カール・マルクス

（ドイツ語原版17-18頁の部分）

マルクス『資本論　1』第1部全　エンゲルス編　長谷部文雄訳

（河出書房「世界の大思想18、昭和39年10月、20-21頁」より採録